

目次

1 設置の趣旨および必要性	4
1) 概要	4
2) 韓国学部を新設する社会的背景と必要性	5
3) 養成する人材像	6
2 学部・学科の特色	8
1) 目白大学の個性・特色	8
(1)「育てて送り出す」大学	8
(2) 座学から活学へ	9
2) 韓国学部韓国語学科の特色	9
3 学部、学科、学位の名称	11
1) 学部名称を韓国学部とする理由	11
2) 学科名称を韓国語学科とする理由	11
3) 学位の名称について	11
4 教育課程の編成の考え方及び特色	12
1) 教育課程の編成の考え方	12
(1) カリキュラム・ポリシー	12
(2) 共通科目区分の設定とその理由	12
(3) 専門教育科目各区分の科目構成とその理由	13
2) 教育課程の特色と主要授業科目の設定	15
(1) 学部学科の趣旨等を実現するための専門分野の編成と履修体系	15
(2) 専門分野の履修体系と主要授業科目の設定	16
3) 授業期間と単位時間数設定の考え方	18
(1) 一年間の授業期間や各授業科目の授業期間について	18
(2) 単位時間数について	19
5 教育方法、履修指導方法及び卒業要件	19
1) 授業の方法、指導方法、受講人数、配当年次	19
(1) 授業方法と教育手法	19
(2) 履修指導方法	19
(3) 受講人数	20
(4) 配当年次	20
2) 卒業要件、履修モデル、卒業研究、成績評価、CAP制	20
(1) 卒業要件	20
(2) 履修モデル	21
(3) 卒業研究	23
(4) 成績評価	23

(5) 履修科目の年間登録上限(CAP 制)	24
6 多様なメディアを高度に利用して、授業を教室以外の場所で履修させる場合の具体的計画	24
1) 実施方法と履修に関する規定	24
2) メディア授業の科目と類型	25
7 海外語学研修等の学外学修を実施する場合の具体的計画	26
1) 韓国学部韓国語学科の学外学修の概要	26
2) 学外学修科目の履修体系と要件	26
3) 学外学修先についての考え方	26
4) 学外学修先の確保の状況	27
5) 学外学修へのサポート体制	27
(1) 留学科目「韓国留学1～12」	27
(2) フィールドワーク科目「現地調査A(韓国)」「現地調査B(韓国)」	28
6) 学外学修の単位認定	29
7) 学外学修の成績評価	29
8) 学外学修のプログラム(区分)の概要	29
9) 韓国における学外学修ができない場合の代替措置	29
8 取得可能な資格	30
1) 「外国語としての韓国語教育資格」に係る学位の授与	30
2) 外部検定試験の合格支援(資格関連科目)	30
9 入学者選抜の概要	31
1) アドミッション・ポリシー	31
2) 入学者選抜方法	31
(1) 総合型選抜	31
(2) 学校推薦型選抜	31
(3) 一般選抜(全学部統一選抜を含む)	31
(4) 大学入学共通テスト利用選抜	31
3) 入学者選抜体制	32
10 教育研究実施組織等の編制の考え方及び特色	32
1) 教員組織の編制の考え方	32
2) 教員組織の年齢構成	32
11 研究の実施についての考え方、体制、取組	33
1) 研究実施の考え方、実施体制及び環境整備について	33
2) 技術職員等による研究活動のサポート体制について	33
3) 研究支援組織の役割等	33
12 施設設備等の整備計画	34
1) 校舎の施設、整備等	34
(1) 現状	34
(2) 韓国学部韓国語学科の学習環境	34

(3) 図書等の資料、及び図書館	34
13 管理運営	35
1) 教授会	35
2) 各種委員会	35
14 自己点検・評価	36
1) 自己点検・評価の実施体制	36
2) 自己点検・評価結果の公表	36
15 情報の公表	37
1) 教育情報の公開	37
2) 財務情報の公開	39
16 教育内容等の改善を図るための組織的な研修等	39
1) 授業内容等の改善に係る取組(FD)実施状況	39
2) 大学経営における組織力の強化を目指した一般職員等の職務上の能力開発(SD)の実施状況	40
17 社会的・職業的自立に関する指導等及び体制	41
1) 教育課程内の取り組みについて	41
2) 教育課程外の取り組みについて	41
3) 適切な指導体制の整備について	41

目白大学韓国学部韓国語学科 設置の趣旨等を記載した書類

1 設置の趣旨および必要性

1) 概要

高度科学技術の発達とそれに伴う産業社会の発展が人類の過去の歴史に前例のない巨大な量的・質的変貌をもたらしている現代において、先進国としての我が国には、国際的な連関性を持った諸問題を世界的視野のもとに解決する役割を担うことへの期待がますます高まっている。現代社会が生み出す諸問題が各地域の固有な問題と複雑に絡み合いながら輻輳しつつあることに鑑みると、グローバルな視座と実践的な語学能力を有した人材の育成は高等教育機関への大きな社会的要請のひとつであるといえよう。

2000年代初期、FIFA ワールドカップ日韓共同共催(2002年に開催)やドラマ「冬のソナタ」(2003年にNHKで放送)をきっかけに日本社会に興起した、いわゆる韓流ブームによって、韓国に興味を持ち韓国語を専門的に学ぼうとする機運が拡大した。(資料1_①②)

こうした背景のもと、2005年に外国語学部を増設した目白大学(以下、本学という。)はアジア語学科韓国語専攻を開設(2008年には韓国語学科へと改組転換)して以降、韓国語教育の先駆的实践と実績とを積み重ねてきた。本学韓国語学科ならではの留学制度や国際交流活動を通じて韓国語運用能力と韓国文化理解とに長けた専門的人材を社会に輩出し、日韓交流にも大きな役割を果たしている。

2020年代に入り日韓交流の規模と質は一層拡大・深化し、経済・政治・文化など多方面で両国の関係は緊密化している。とりわけ韓国が、BTSやTWICEに代表されるK-POPを中心とした文化コンテンツ産業に力点を置いたことから、韓国文化への注目は世界中で加速度的に高まり、日本における韓国熱も上昇の一途を辿っている。(資料1_③④⑤⑥⑦)また、コロナ禍で対面交流ができない状況が生じたことを契機として、Web上で遠隔により、それぞれの国そして空間に居ながらにして同時双方向に交流する機会も、従来の地域や世代を超えて急激に拡大した。

大きく変化する潮流の中、日韓関係においては、相互理解の対話を促進する次世代を担う人材の育成がますます重要な課題となった。他方、日韓相互の歴史認識の差異や経済的不均衡に起因する意思疎通の齟齬も指摘され、殊更に排外的な言動をとるような社会現象も一部で生じている。日韓交流に尽力し得る人材育成のための韓国語教育に対する社会的要請が顕在化しているにもかかわらず、我が国においては、交流の規模も質も増大する隣国の言語と文化とを専門的に学ぶことができる高等教育機関は極めて少ないという現状がある。

本学ではこれらの実状とこれまでの教育成果を踏まえたうえで、新たに韓国学部を開設し、ここに学ぶ学生の韓国語の高度な運用能力を伸長させ、韓国の歴史・文化・社会に関する広い視野を育む教育課程を

通して、次世代の日韓関係を担う実働人材の育成という社会からの要請に応えようとする。韓国語と韓国の諸事情に通暁した人材を育てる高等教育機関としての先駆的役割を、本学があらためて担っていく。

韓国学部では留学や現地研修を必修とする教育手法を継続展開する。学生の実践的・体験的な国際感覚を養うとともに、おとなしいと言われる日本の若年世代の学生たちが、相手が語る論旨を的確にとらえうえて、自分の考えをはっきり伝えることができるように、積極的かつ前向きな人間性の涵養を図る。

本学は韓国学部の開設により、日韓相互理解の促進と国際社会で活躍できる人材の育成に貢献する。

2) 韓国学部を新設する社会的背景と必要性

韓国学部の設置は、朝鮮半島が日本の隣に位置し、日本列島とは歴史的にも文化的にも深い関係を有することに起因する。日本の文化は古代より、朝鮮半島経由で中華文明の影響を被り、また朝鮮半島固有の文化の影響を受けながら育まれてきた面がある。日本の歴史と文化の形成は、朝鮮半島の存在とその影響なくして語ることはできない。

その一方で近代以降においては、日本の国家観・民族観が確立してきたことの逆説的側面として、特に韓国との関係において相互の民族感情のしこりが意識されるにいたっている。今後、より一層踏み込んだ理解に基づく交流の形成と、そのための人材育成が急務となっている。

広く東アジア諸国・地域に目を向けると、経済的な分業体制が米国を視野に強化され、分業の内実も生産と消費の関係が重層的に複合する水平的なものとなっており、各企業体も多国籍的な組織構造へと転換している。いわゆるサプライチェーンの進展によって、例えば自動車産業や鉄鋼・造船業、または ICT 産業や観光産業、或いは金融業界においても、原材料や技術の分担・共有のみならず、経済そのものの相互依存は 22 世紀に向けて一層の拡大が見込まれていて、このことが逆に各国・地域に国粋主義的動向を生み出す一因ともなっている。とりわけ日韓両国の東アジア情勢における影響力が世界への波及効果という側面で、より重要度を増していることが、双方の言語を習得し、文化的歴史的背景を熟知している実務者を必要とする社会的意義を深めている。(資料1_⑩⑬)

また、朝鮮半島情勢に絡んだ世界的な協議の場が頻繁に設けられるなど、東アジア諸国・地域では政治的な連携や折衝も進んでおり、緊迫した場面での通訳や翻訳においても韓国の人々の国民性と心情を体験的に理解している人材を養成する教育のニーズは高まっていくと考えられる。

そして何より、現代的な日韓交流の増大を象徴するのが文化面の状況である。J-POP と K-POP との表舞台でのコラボレーションや、これに伴う芸能事務所やマネジメントの協業、グループメンバーの日韓相互募集など、その融合と交流の例示には枚挙にいとまがない。Web を駆使した配信や双方向コミュニケーションの活用や、K-Beauty と呼ばれるコスメ産業を流行の最先端まで押し上げた韓国文化コンテンツ界の手法は今や、世界規模で市場を席卷しており、若年層だけにとどまらない幅広い世代の日本人が、何らかの形で日常的に韓国文化に触れ、韓国そして韓国語への興味・関心を高めていくきっかけになっていることは言を俟たない。(資料1_⑧⑨⑪⑫⑭)

このような両国間の密接な関係とそれを取り巻く国際事情や社会的要請を背景に、今後ますます観光、人的往来、企業活動、学術交流においても、かつてない規模で活発な交流が展開されることは明白である。他方、歴史認識や社会制度の相違に起因する課題もいまだ存在し、これらに向き合って相互理解の促進と建設的対話を担う人材の育成が待たれている。本学が韓国学部を新設する必要性は、まさにここにある。

日本国内における韓国語教育の意義はますます高まっており、とりわけ若年層を中心とした韓国文化への関心の高まりは、教育現場において韓国語を体系的に学ぶ機会の拡充を求める社会的需要という観点からも大きな位置を占めている。韓国語は、アジア言語の中でも日本語との言語的・文化的近接性が強く、言語学的に教育的・研究的価値を有しているとともに、日韓両国の市民交流や産業活動の現場で必要とされる実用的な言語である。

本学は 2005 年に外国語学部アジア語学科韓国語専攻を設置、他大学に先駆けて 2008 年には日本初の韓国語学科を設置して、これまで体系的な教育課程を通じて多数の専門的人材を育成してきた。専攻設置の当初から所属学生の「全員交換留学」を実施して全員が1年間以上の韓国協定校に正規留学かつ在籍4年間で学位取得できる留学制度を実施してきた。また、国際交流プログラムに基づいた夏期・冬期の韓国語語学研修の充実、デュアル・ディグリー(D.D.)制度を導入して毎年 10 人以上の複数学位取得者を輩出するなど、韓国語教育における先進的制度導入を果たしてきた。2019 年度末からのコロナ禍にあっても、本学は全員交換留学の旗を降ろすことなく遠隔留学の手法をもって乗り越え、有益な実践例を社会に提示した。韓国サイバー大学校、韓国外国語大学校サイバー大学との協定単位認定の実績はこの証左である。開設以降 1,000 人を超える卒業生が社会で幅広く活躍しており、その多くは教育界、企業、国際交流機関で生きた韓国語に触れている。さらに、こうした実践に基づく韓国語教育に関する研究の推進という面で、本学大学院言語文化研究科に中国・韓国言語文化専攻を置き(2008 年設置)、韓国言語文化分野で修士(韓国言語文化)の学位を取得できるようにした。学科の教員らが中心的役割を担って「日本韓国語教育学会」を発足(2009 年創立)させた経緯にも、その研究に対する姿勢が表れており、韓国語学科の教育実践と教育研究の実績は、斯界のみならず両国の教育関係者からも高い評価を受けている。

昨年(2025 年)8月には、金恵景韓国大統領夫人が初となる海外訪問先に本学が選ばれ、『韓国語を学び、夢を開く』というテーマで韓国語学科の学生 20 名とのトークセッションを開催、冒頭挨拶では韓国大統領夫人から直接、本学の韓国語教育に大きな期待を寄せているとのメッセージがあり、そのスピーチは韓国国内でも大きく報道された。(資料2)

こうした蓄積を基盤として、本学は新たに韓国学部を設置する。目白大学韓国学部は、韓国語を中心的学問分野として「コース」「専攻」「学科」ではない、「学部」レベルで専門的に学修できる日本国内で唯一の教育機関として位置づけられることになり、韓国語の高度な運用能力のみならず、韓国の歴史・文化・社会に関する学術的知識を体系的に修得させる教育課程により人材育成することで社会からの要請に応える。他に類を見ない現地研修や交換留学を必修的に組み込み、体験的学習を通じて実践的な国際感覚を涵養し、韓国を理解したうえでの諸策を日本から発信できる人材を養成する。

韓国学部の設置は、我が国における韓国語教育の水準を飛躍的に高めることは無論、日韓両国の相互理解を促進し、国際社会で活躍できる人材の育成に資する。地域社会や国際社会との連携を深め、韓国語及び韓国語文化の教育・研究拠点として広く両国の社会に、ひいては地球社会に人材輩出を通して貢献する。

3) 養成する人材像

本学の建学の精神は「主・師・親」である。これは、学園創立者である佐藤重遠が示したもので、日蓮の著作である『開目抄』に由来する。この書物の真意は「目を開くこと」すなわち「迷妄を取り除いて真理に目覚め

ること」であり、この書の冒頭に記されている「一切衆生の尊敬すべき三者として主師親がある」とされている言葉からとって人間形成の目標とした。この「主・師・親」をもって目白学園の建学の精神と定めた。

その後、建学の精神に現代的な意味づけを行うために、1977 年に(当時の目白学園女子教育研究所内に)建学の精神研究部会を設置し、検討を行った。そこで「主」は国家、社会への献身的態度、「師」は真理探究の熱意、そして「親」は人間尊重の精神を意味するものとした。この建学の精神は、豊かな人間関係を育み、自己教育に励み、自立した社会人として生き抜く力量を養うという教育の実践基盤を示すものである。この建学の精神に基づき、本学の教育理念を以下のように定めている。

第1は良識ある日本人として国を愛し、国家・社会の誠実な成員としての責任感と連帯意識を養い、公共奉仕の念を培い、やがて国際社会に生きる日本の力強い担い手に成長すること、第2に自らを真理に向けて導いてくれる人に対して敬愛の念を持って接し、常に謙虚にものごとを学ぶ態度を養うこと、そして第3に人が互いに慈しみ育む場である家庭を大切にし、家族愛、人間愛の尊さを理解し実践することである。

本学の目的は、目白大学学則第1条に記すように「教育基本法及び建学の精神に基づき、創造的な知性と豊かな人間性及び応用的諸能力をそなえ、わが国の発展、国際社会の平和と福祉に貢献する主体性のある人材の育成」である。これを踏まえ、韓国学部韓国語学科の人材養成に係る目的について、下のとおり定め学則に明記する。

<韓国学部韓国語学科の養成する人材像>

「実用的韓国語運用能力を有するとともに韓国文化や諸事情を理解することを通して、さまざまな専門知識を持ち、現代社会が生み出す国際的諸問題に広い視野で主体的に対応することができる人材を育成する。」

韓国学部韓国語学科では、この人材養成に係る目的を達成するために、全学共通の学士基盤力(社会性・知力・人間性)及び韓国語学科の学士専門力を獲得できたと認められる学生に対し、学士(韓国語または韓国語教育)の学士の学位を授与し卒業を認定する。韓国語学科のディプロマ・ポリシーは、目白大学・目白大学短期大学部の卒業認定・学位授与等の方針に関する規程に以下のとおり定める。

<韓国学部韓国語学科の卒業認定・学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー)>

1. 韓国語表現を身につけ高度なコミュニケーションをとることができる
2. 韓国の社会と文化の特長を理解し豊かな社会への発展に貢献することができる
3. 多様な背景を持つ人と積極的に交流し、国際的視点に立って国際社会で起こる諸問題の発見とその解決に主体的で協調することができる
4. 韓国語および韓国文化の専門知識を教えることができる

このディプロマ・ポリシー達成のために、どのような教育課程を編成し、どのような教育内容・方法を実施し、学修成果をどのように評価するかをより具体的に示すものとしてカリキュラム・ポリシーを目白大学・目白大学短期大学部の卒業認定・学位授与等の方針に関する規程に以下のとおり定める。

<韓国学部韓国語学科の教育課程編成・実施の方針(カリキュラム・ポリシー)>

【教育内容に関する方針】

- ①韓国語表現を身につけ高度なコミュニケーションをとることができるようになるために、1年次に韓国語の運用能力を養成する演習科目、2年次に韓国留学科目、3年次以降は韓国語学や通訳、翻訳などの科目を開設する。
- ②韓国の社会と文化の特長を理解し豊かな社会への発展に貢献することができるようになるために、1年次に韓国文化に関する講義科目、2年次に韓国留学時の現地調査科目、3年次以降は韓国の伝統的文化と現代の文化コンテンツについてより深く学ぶための科目を開設する。
- ③多様な背景を持つ人と積極的に交流し、国際的視点に立って国際社会で起こる諸問題の発見とその解決に主体的で協調することができるようになるために、1年次から韓国事情を理解するための講義及び演習科目を体系的に開設する。
- ④韓国語および韓国文化の専門知識を教えることができるようになるために、1年次から韓国語教育の理論と実践に関する科目を体系的に開設する。

【学修成果の評価に関する方針】

- ①全ての授業科目に、単位修得に必要な学修成果を設定し、課題ないし試験による評価を行う。
- ②卒業時には、卒業研究の成果物と口述試験により、学士専門力の達成状況を評価する。
- ③授業科目とは別に、学士専門力に関する到達目標を定め、学生の学習到達度を評価する。

韓国学部韓国語学科では、入学してくる学生が、本学の建学の精神に従い、学部の人材育成目標の達成に向けて開設される専門教育科目群を履修することによって、卒業までに学部・学科の専門分野に関わる知識や技能(学士専門力)を獲得できるようにするために、以下のような資質・能力を有する人を受け入れることとし、目白大学・目白大学短期大学部の卒業認定・学位授与等の方針に関する規程にアドミッション・ポリシーとして定める。

<韓国学部韓国語学科の入学者の受入れの方針(アドミッション・ポリシー)>

1. 韓国語の学修と韓国文化や諸事情の理解を通じて、社会の発展に貢献していこうとする人
2. 韓国語・韓国文化・韓国語教育の学修に必要となる基礎的な知識と技能を身につけており、自らテーマを見だし学問として探究していこうとする人
3. 韓国を中心とする多様な背景を持つ他者と積極的に交流・協働しながら、国際的な視野で諸問題の解決に主体的に取り組もうとする姿勢を持つ人

2 学部・学科の特色

1) 目白大学の個性・特色

(1)「育てて送り出す」大学

本学では、1994年の大学開設以来「育てて送り出す」を社会的使命と位置づけ、多様に変化する現代社会を生き抜く人材育成を行っている。

本学の個性・特色は第1に「育てる ― 面倒見が良く、丁寧な指導」を重視している点にある。多様な学生を社会に送り出すために、本学は独自の初年次セミナーで、大学での学び方を習得し、社会人となる自覚を促しその素養を身につけさせるようにしている。クラス担任制をとり、学修のみならず学生生活全般について、入学時から担任教員が丁寧にサポートしている。教員と学生の距離の近さ、面倒見の良さ、親密なコミュニケーションが本学の大きな特長である。

第2は「伸ばす ― 少人数制、実践重視で力をつける」ことである。本学では、個性を見出し伸ばす教育を重要な柱としている。授業の多くを少人数で行い、教員や学生同士のコミュニケーションを通して、着実に力をつけさせることを目指している。また、学生同士で行うグループワーク、地域社会や職域の中で体験する実習やインターンシップ、就業力を養う授業、あるいは好奇心を刺激しチャレンジ精神を応援するユニークなサポート体制など、実体験を重視した学びの環境・制度を活用することで自主性を養い、学びへの関心を深め、人間形成全般へとつなげていく。

第3は「送り出す ― 将来につなげる、社会につなげる」ことである。一人ひとりが学び、修得したものをどのように将来につなげ、社会に生かすことができるかを重視している。本学のカリキュラムは4年後の卒業時を意識し、共通科目と専門教育科目をバランス良く有機的に配置している。授業での学び以外にも、それぞれの個性に応じたきめ細かなキャリア支援で、学生の意欲・能力を高める取組みを行っている。

(2) 座学から活学へ

本学が1994年の創立時に掲げた理念の一つに「座学から活学へ」がある。これは、学生が教室内で行われる講義を受講するだけでなく、積極的に学外に出て臨地体験型学修を行うという意味であり、創立時より教育課程に「臨地研修」等フィールドワークの技法を取り入れた科目群を設け学外学修を奨励した。その精神は今も引き継がれ、心理学部・人間学部・保健医療学部・看護学部では臨床実習や教育実習として、社会学部・メディア学部では社会調査やフィールドスタディなど社会連携科目として、外国語学部では留学科目として、学外学修を通して実践力の涵養を図ることも本学の大きな特色となっている。韓国学部の教育課程においても、座学で得た成果を活かす学びの場として「使える韓国語の修得」と「韓国学全般の現地体験学修」とを掲げ、原則として希望者全員が1年間の交換留学(または2年間のデュアル・ディグリー留学)を行う。

2) 韓国学部韓国語学科の特色

韓国学部韓国語学科では、韓国語とともに韓国学全般を学修対象とする。韓国語学習者の多くが、言語としての韓国語そのものの魅力よりむしろ、K-POP や韓国ドラマに対する興味関心を強い学習モチベーションにしているという傾向がある。このような現状から韓国学部韓国語学科の教育課程は、韓国語とともに韓国学全般の専門分野までを網羅し、学修者が韓国語の運用能力はもちろん韓国学の分野別専門家としての資質を獲得できるよう取り組む。その特色として、以下の4項目を掲げる。

(1) 高度な韓国語運用能力を修得することができる。

韓国語の4技能(読む・書く・聞く・話す)をネイティブ教員が少人数クラスで指導し、1年次に全員が中級(TOPIK3級)まで到達することを目標とする。さらに2年次の1年間の留学(または2年間のデュアル・ディグリー留学)により韓国語運用能力を向上させる。卒業までに、全員が上級(TOPIK6級)に到達することを目指す。

韓国学部韓国語学科では、入学時にプレイスメントテストを実施し、習熟度別の少人数クラス(入門クラス、初級クラス、中級クラス、上級クラス)に分けて授業を行う。入門クラスの学生であっても1年次に韓国語能力試験中級(TOPIK3級)以上に合格できるよう、韓国語の90分授業を週に7コマ、年間に30週間、計315時間を確保することにより基礎となる4技能を集中的に指導する。全クラスの授業をネイティブ教員が担当し、学習者の韓国語能力に応じて段階的に韓国語による授業進行に変えることにより、それぞれのクラスの学生の韓国語能力を確実に伸ばすことができ、全員が留学生活に必要な十分な韓国語を修得することができる。2年次には希望者全員が韓国の協定大学における1年間の交換留学(または2年間のデュアル・ディグリー留学)に参加し、現地で実践的な韓国語を体得できる。留学後の3年次には「韓日(日韓)翻訳演習」や「韓日(日韓)通訳演習」等の韓国語応用科目群を履修することで、より高度な韓国語運用能力を修得できる。

(2) 現代の韓国文化など、韓国について広く学ぶことができる。

韓国事情や文化コンテンツ(映画・ドラマ・K-POP・K-Beauty等)についても専門的に学修できる科目を開設する。1年次夏季の短期留学や2年次の長期留学を通して、韓国文化を体験的に深く理解する。留学後は、各自の関心に沿って韓国語・韓国文化・韓国語教育等からテーマを定め、さらに深く掘り下げて学ぶ。

韓国学部韓国語学科では、専門分野の基幹となる学部コア科目を1年次に設け「韓国学入門」「文化比較論」「韓流コンテンツ概論」において韓国学全般、文化比較、韓流コンテンツそれぞれの基本を理解し、基礎となる知識を修得する。専門基礎科目の「韓国事情」では、留学に関する手続きから現地の生活文化(食事・住居・交通手段・通信機器の活用等)、現代韓国の社会システムとルール、さらには学修面を中心とした大学生活における諸事情までを理解し、基礎となる知識を広く修得する。1年次において韓国生活に必要な情報をはじめ、韓国と国際社会との関係、さらには韓国文化コンテンツの強みといった各専門分野の概要と基礎知識を修得することにより、2年次には関心分野を選定のうえ現地調査を体験できる。留学先の大学では「グローバル韓国学科」「Web 文芸学科」「韓国語文学科」「美容藝術学科」などに所属し、専門知識を修得することもできる。留学後の3・4年次では、専門応用科目の中で各自がさらに深めたい専門分野を中心に履修計画し、韓国学の分野別専門家としての資質を獲得できる。

(3) 全員が1年間以上の留学をすることができる。

希望者全員が2年次に韓国の協定大学に1年間の交換留学または2年間のデュアル・ディグリー留学ができる。デュアル・ディグリー留学とは、協定校と本学で修得した単位を相互に認定し、卒業要件を満たすことにより、4年間で協定校と本学の2つの学位取得を可能とする制度である。

韓国学部韓国語学科では、2年次に現地における実践学修を通して使える韓国語を修得できるようにするとともに、韓国学として各自の関心分野を、留学先となる協定大学に開設された専門教育科目や教養科目から履修を計画し専門知識を修得できるようにするため、希望者全員が交換留学(またはデュアル・ディグリー留学)できる体制を整備する。

交換留学(またはデュアル・ディグリー留学)に参加することにより、寄宿舍での共同生活を基本とする現地での生活、課外活動としての協定大学のサークル活動・ボランティア活動・国際交流活動等を通して、協調性やコミュニケーション力を大きく伸ばすことができる。また留学期間中には、韓国に進出している日本企業や韓国企業の情報を現地で収集し、卒業年次に向けた就職活動に生かすことができる。

（４）１年次から４年次まで各自の関心にに基づき体系的に探究することができる。

１年次から関心テーマを絞るとともに、４年間の学修計画を立てられるよう指導する。留学中のフィールドワーク調査から帰国後のセミナー・卒業研究まで一貫して専門分野を深く探究することで、将来のキャリア実現に向けた準備に取り組む。

韓国学部韓国語学科では、初年次セミナー（「ベーシックセミナーⅠ・Ⅱ」）において、大学生としての基本姿勢を理解したうえで全員が４年間の学修目標を設定し、１年ごとの学修目標と計画を具体化できるように指導する。また併せて、グループワークを多く用いながら、レポート作成とプレゼンテーションのスキルを修得し、課題についての情報収集の方法と活用を理解し、論理的な思考法を身につける。学部コア科目の「フィールドワーク入門」では、フィールドワークの技法について基本を理解し、２年次留学中に現地で実践するフィールドワーク（「現地調査Ａ・Ｂ」）に備える。留学中は協定大学に開設された専門教育科目と教養科目を各自の関心分野と関連させて履修する。３年次の「韓国語専門セミナーＡ・Ｂ」では、各自の関心分野を専門分野に引き上げ研究手法についても学ぶ。４年次の「韓国語特別セミナーＡ・Ｂ」では、「卒業研究」として各自が選択した卒業論文または卒業制作について計画し、進捗報告と発表及び質疑応答を重ね、最終発表に至る過程で韓国学の分野別専門家として活躍するための素養をすべて身につけることができる。

３ 学部、学科、学位の名称

１）学部名称を韓国学部とする理由

新たに設置する学部の名称を「韓国学部」(Faculty of Korean Studies)とする。韓国学部は広い視野から韓国を学び、韓国語の運用能力だけでなく、同時に韓国文化や諸事情に関する専門知識を修得し、これらを国際社会に生かし得る人材の養成を目指している。韓国の社会・文学・歴史・思想から、現代韓国の文化コンテンツやビジネスといった数多の韓国学分野・領域について専門教育課程として広く扱うことから、新たに設置する学部の特色を端的に示しており、また一般に理解されやすい名称であると考える。

２）学科名称を韓国語学科とする理由

韓国学部を設置する学科の名称を「韓国語学科」(Department of Korean Language Studies)とする。韓国学の分野別専門家になるには、その礎として韓国語による高度なコミュニケーション能力の獲得が不可欠である。韓国語教育の実践という意味において、本学は前身である外国語学部韓国語学科の取り組みについての認知と評価を自負していることから、同じ学科名称を引き続き使用することが相応しいと考える。

３）学位の名称について

韓国学部韓国語学科において学士の学位に付記する名称を「学士(韓国語)」または「学士(韓国語教育)」とする。いずれも前身である外国語学部韓国語学科の取り組みを引き継ぐものである。なお「学士(韓国語教育)」は、韓国語学習の指導者を目指す学生が「韓国語教育実習」を含む指定科目の単位取得要件をすべて満たした場合にのみ授与される。

4 教育課程の編成の考え方及び特色

1) 教育課程の編成の考え方

(1) カリキュラム・ポリシー

本学では、授業科目を共通科目と専門教育科目に区分し、専門教育科目については、学士専門力を身につけるため、カリキュラム・ポリシーに沿って編成している。韓国学部韓国語学科のカリキュラム・ポリシーは、以下のとおりである。

【教育内容に関する方針】

①韓国語表現を身につけ高度なコミュニケーションをとることができるようになるために、1年次に韓国語の運用能力を養成する演習科目、2年次に韓国留学科目、3年次以降は韓国語学や通訳、翻訳などの科目を開設する。

②韓国の社会と文化の特長を理解し豊かな社会への発展に貢献することができるようになるために、1年次に韓国文化に関する講義科目、2年次に韓国留学時の現地調査科目、3年次以降は韓国の伝統的文化と現代の文化コンテンツについてより深く学ぶための科目を開設する。

③多様な背景を持つ人と積極的に交流し、国際的視点に立って国際社会で起こる諸問題の発見とその解決に主体的で協調することができるようになるために、1年次から韓国事情を理解するための講義及び演習科目を体系的に開設する。

④韓国語および韓国文化の専門知識を教えることができるようになるために、1年次から韓国語教育の理論と実践に関する科目を体系的に開設する。

【学修成果の評価に関する方針】

①全ての授業科目に、単位修得に必要な学修成果を設定し、課題ないし試験による評価を行う。

②卒業時には、卒業研究の成果物と口述試験により、学士専門力の達成状況进行评估する。

③授業科目とは別に、学士専門力に関する到達目標を定め、学生の学習到達度を評価する。

(2) 共通科目区分の設定とその理由

入学初年度の共通科目には、目白大学新宿キャンパスの全学部・学科の学生が共通して履修する科目を多く配置している。これは、2年次以降に本格的に増加する各学部・学科の専門教育科目に備え、初年次のうちに大学での学修に必要な基礎的資質・能力を養成し、学士としての基礎的な資質を身につけることを目的としているためである。

多様な科目で幅広い教養や学ぶ姿勢・技法を身につけ、社会が求める人材の育成を図るため、共通科目には区分を設けている。共通科目区分はアカデミックスキルズ、外国語(英語、世界の言語、日本語)及びウェルビーイング(総合、スポーツ、情報活用、キャリア、探究)からなる。これら3つの科目区分によって、全学共通の学士基盤力を体系的・段階的に育成する。

アカデミックスキルズ区分では「スタートアップセミナー」「ベーシックセミナー」「アドバンストセミナー」「アカデミック・コミュニケーションⅠ・Ⅱ」を必修・必履修科目として配置し、大学での主体的な学び方やレポート、プレゼンテーション、卒業研究に直結する文章構成力・討論力を全ての学生に習得させる。外国語区分では、「英語」「世界の言語」「日本語」の3つの小区分を置き、「基礎英語A・B」「発展英語」を基盤に英語・多言語(中国語・フランス語等)を段階的に展開し、学部特性や学生の語学力に応じた運用能力と異文化理解

力を強化する。

ウェルビーイング区分は、人文・社会科学的な教養形成、心身の健康意識、生涯を通じたウェルビーイング基盤の構築を目的に「総合」「スポーツ」「情報活用」「キャリア」「探究」のさらに5つの小区分で体系的に科目を配置する。総合区分には「哲学」「日本国憲法」「社会学概論」「持続可能な社会を考える」「デジタル化する社会を考える」等を置き、教養の幅と深さを確保する。スポーツ区分では、「身体運動」「レクリエーションスポーツ」を必修科目とし「生涯スポーツA～D」を選択科目として健康習慣を根付かせる。情報活用区分は「ICT 入門」を1年次必修基礎、また「ICT 基礎A～D」「ICT 応用A・B」を選択必修・選択で展開し、情報リテラシーからデジタル実践力までを段階的に高める。キャリア区分では「キャリアデザイン入門」を起点に「ディスカッション」「キャリア演習」等でキャリア形成力・社会参画力を育む。探究区分では「地域連携とボランティア」「学外体験プログラム」を通じ、実践的課題解決を促す。これらの科目区分は、本学が教育理念として掲げる「社会への献身的態度」「真理探究の熱意」「人間尊重の精神」とも明確に対応しており、必修・選択必修・自由選択の科目属性によって、教育課程全体の体系性と一貫性を担保する。

履修順序(配当年次)は「1年次で学修基盤を確立し、2年次以降で発展・応用・統合へと展開する」原則に基づき設計されている。1年次では、必修科目として「ベーシックセミナー」「アドバンストセミナー」「アカデミック・コミュニケーションⅠ・Ⅱ」「ICT 入門」「キャリアデザイン入門」「基礎英語A・B」「発展英語」「身体運動」「レクリエーションスポーツ」を集中的に配置し、大学での学び方、初歩的な文章表現・プレゼンテーション力、情報リテラシー、キャリア意識、健康・ウェルビーイングの基礎習慣を早期に形成する。また、「ICT 基礎A～D」「外国語選択必修(発展英語、世界の言語)」を選択必修科目として学生の学科特性や興味に応じた発展的履修を促す。2年次以降の選択科目として、教養・多言語・地域連携・キャリア科目を選択・自由履修することで、専門教育と接続しながら学士基盤力の各能力要素を深化・統合させる構成となっている。

科目の単位数は、履修の柔軟性と多様な分野への挑戦機会を確保するため、多くを1～2単位とし、プロジェクト・実践型科目である「地域探究A・B」「ICT 応用A・B」「キャリアデザイン応用」「学外体験プログラム」「地域連携とボランティア」等に複数単位を配分することで、学修時間と成果の重みを適切に反映させている。

上記のうち「ベーシックセミナー」「アドバンストセミナー」「アカデミック・コミュニケーションⅠ・Ⅱ」「発展英語」「ICT 入門」「身体運動」「レクリエーションスポーツ」及び「キャリアデザイン入門」を共通科目の主要授業科目に設定している。社会性・知力・人間性といった中核能力を直接育成し、学士基盤力を形成するための主要な手段となる科目と位置付けている。

(3) 専門教育科目各区分の科目構成とその理由

韓国学部韓国語学科は、カリキュラム・ポリシーに基づき、授業科目を学部コア科目、専門基礎科目、留学科目、フィールドワーク、専門応用科目、資格関連科目、教育科目及びセミナー・卒業研究に区分し、履修の体系的性及び関連性を確保できるように設定している。以下に、それぞれの科目区分の詳細を記す。

<学部コア科目>

韓国学部韓国語学科は、1学部1学科の長所を生かして専門教育の基盤となる独自の学部コア科目「韓国学入門」「韓国語習得論」「文化比較論」「韓流コンテンツ概論」「対照言語学」「フィールドワーク入門」を必修科目として6科目(12 単位)を設ける。初年次に学科の専門教育の基幹となる知識を身につけ、関心分野を優先に履修計画を立て、4年間の学修成果の達成に向けて学修目標を設定し、計画的な学修活動を促進するためである。

<専門基礎科目>

専門基礎科目においては、「韓国語」「韓国社会と文化」「韓国語教育」「韓国事情」の科目群を設ける。詳細は、以下のとおりである。

韓国語の科目群は、1年次に韓国語の4技能(読む・書く・聞く・話す)の向上を目的とした必修科目として、8科目(14 単位)を設ける。これは、2年次に希望者全員が参加できる1年間の交換留学(または2年間のデュアル・ディグリー留学)に備えるためのものである。また、1年次の学修目標の一つとして韓国語中級(TOPIK3級)以上への到達を掲げ、2年次の留学先において韓国語による授業を受講できる水準に達することを目的とする。

韓国社会と文化の科目群は、韓国の文化や諸事情を理解するための専門基礎科目として設けるものである。本科目群では、韓国の社会、文化、文学、歴史、思想、文化コンテンツ、国際関係の基礎知識を修得することを目的とする。専門分野のより詳細な学修につなげるため、領域別に選択できるように選択必修科目として8科目(16 単位)を設定する。

韓国語教育の科目群は、韓国語教育の基礎知識を修得することを目的として2科目(4単位)設ける。学修領域として韓国語教育を選択する場合は、本科目群を必修科目とする。韓国語教育以外の学修領域を選択した場合も韓国語教育の基礎知識を修得できるよう選択必修科目として設定する。

韓国事情の科目群は、本学の留学制度や韓国の最新の諸事情に関する基本知識を修得することを目的とし、1年次の必修科目として2科目(4単位)設ける。

<留学科目>

2年次に希望者全員が1年間の交換留学(または2年間のデュアル・ディグリー留学)に参加し、協定大学の学部授業の受講を通して関心分野の専門知識を積極的に学修できるようにする。また、留学先で修得した単位を本学の単位として認定(互換)ができるよう留学科目として科目(48 単位)

「韓国留学1～12」を設ける。これらの留学科目は、留学先で学修した専門分野の内容に基づき、対応する各番号の「韓国留学」科目として関連付け、本学の卒業要件単位に認定する。

また、当該留学科目「韓国留学1～12」における修得単位数については、次の通りにそれぞれの科目群への算入を可能とする。

- ・「韓国留学1～4」は、科目区分の専門基礎科目「韓国社会と文化」と「韓国語教育」の科目群に算入可能。
- ・「韓国留学5～8」は、科目区分の専門応用科目「韓国語」の科目群に算入可能。
- ・「韓国留学9～12」は、科目区分の専門応用科目の「韓国社会と文化」の科目群に算入可能。

<フィールドワーク>

1年次に学部コア科目として「フィールドワーク入門」を設置し、フィールドワークの基礎的な知識と技能を習得することを目的とする。これにより、2年次以降の現地調査やフィールドワークに向けた準備を整え、実践的な学修の土台を築く。

2年次には、1年間の交換留学または2年間のデュアル・ディグリー留学を通じて、各自の関心分野に基づくテーマ設定とフィールドワークに積極的に取り組むことにあたり、「現地調査(韓国)A・B」を必修科目として設け、留学先でのフィールドワークの学修成果を高めることを目指す。

留学期間中に関心分野についてのフィールドワークを行うことで、専門分野研究の基盤を築き、学術的な深みを持たせることを期待する。

さらに、これらの科目群は体系的な専門教育科目として位置付け、学修の体系化と深化を図ることを目的

とする。

＜専門応用科目＞

専門応用科目においては、「韓国語」「韓国社会と文化」の科目群を設ける。詳細は、以下のとおりである。

韓国語の科目群は、1年次に履修する学部コア科目「韓国学入門」「韓国語習得論」「対照言語学」および専門基礎科目の韓国語の科目群において修得した基礎知識と、2年次における留学先で修得した韓国語に関する専門知識を基盤とするものである。これらの知識を韓国語学、韓日対照言語学、韓日翻訳・通訳等の分野へ応用できるよう能力の養成を目的とする。実用的な韓国語の修得させるため、「韓国語時事討論演習A・B」「韓国語作文演習」「韓国語課題討論演習」を含む14科目(16単位)を選択必修科目として設ける。

韓国社会と文化の科目群は、1年次に履修する学部コア科目「韓国学入門」「文化比較論」「韓流コンテンツ概論」「フィールドワーク入門」および専門基礎科目の韓国社会と文化の科目群において修得した基礎知識と、2年次に留学先で修得した韓国の文化や諸事情に関する専門知識を基盤とするものである。これらの知識を韓国学、韓日文化比較論、韓国文化コンテンツ学、韓国国際関係学等へ応用できるよう能力の養成を目的とする。「韓日文化対比論」「韓国文化コンテンツ批評」「コンテンツの理論と実践」「東アジア関係論A」「東アジア関係論B」を含む9科目(18単位)を選択必修科目として設定する。

＜資格関連科目＞

韓国学部韓国語学科は、2年次に希望者全員を韓国の協定大学に1年間の交換留学(または2年間のデュアル・ディグリー留学)として派遣する際に、留学要件として韓国語中級(TOPIK3級)以上を求められる。そのため、TOPIK対策として、次の通り3科目(3単位)設ける。1年次には試験の出題傾向や回答方法を体系的に学修できるよう「TOPIK分析A」「TOPIK分析B」を、3年次には、韓国語を生かした就職及び進学の際に資格として韓国語上級(TOPIK5級・6級)が求められることに備える「検定韓国語演習」を設ける。

＜教育科目＞

韓国学部韓国語学科は、日本社会における韓国語教育の需要増加に対応し、そのニーズに応えるために、韓国語教育を実施できる人材の育成に努める。

それにあたり、本学の認定資格として「外国語としての韓国語教育資格」を授与することとし、1年次に韓国語教育2科目(4単位)、2・3・4年次の韓国語の教育科目群として6科目(11単位)を設ける。

＜セミナー・卒業研究＞

韓国学部韓国語学科は、3年次に専門分野の研究を深めるために「韓国語専門セミナーA・B」の2科目(2単位)を、4年次に専門分野の研究を極めるために「韓国語特別セミナーA・B」の2科目(2単位)を設ける。また4年間の専門分野研究の集大成として「卒業研究」を必修科目として1科目(4単位)設け、「卒業論文」または「卒業制作」を完成させ発表することとする。

2) 教育課程の特色と主要授業科目の設定

(1) 学部学科の趣旨等を実現するための専門分野の編成と履修体系

韓国学部韓国語学科では、韓国語とともに韓国学全般を学修対象とする。その背景には、多くの韓国語学習者が、言語としての韓国語の魅力よりも、K-POPや韓国ドラマへの関心を学習のモチベーションとしている傾向があることにある。この現状を踏まえ、本学科の専門教育課程では、韓国語とともに韓国学全般の

専門分野までを網羅し、学修者が韓国語の運用能力だけでなく、韓国学の各領域における専門的な知識と資質を身につけられるよう取り組む。

本学科では、1学科あたりの専門分野を大きく4つの「領域別履修体系」に分け、それぞれの領域に対応した履修方法を推奨する。具体的には、以下の4つの領域別履修体系を設ける。

1. 韓国語(韓日対照言語、韓日翻訳・通訳)領域
2. 韓国文化(韓日文化比較、文化コンテンツ)領域
3. 韓国事情(韓国の諸事情、国際関係)領域
4. 韓国語教育領域

これらの領域別履修体系に基づき、卒業に必要な単位(90 単位)は、必修科目 42 単位、選択必修科目 42 単位、選択科目6単位から構成される。学修者が韓国語と韓国学全般の専門分野を深く理解し、実践的な運用能力とともに各領域の専門家としての資質を獲得するためには、必修科目に加え、各領域の主要授業科目を重点的に履修することを推奨する。

初年次では、上記の①～④の専門分野に対応した領域別履修体系の中から各自の関心に基づき、主要授業科目を必修科目として履修する。2年次には、関心のある分野に基づき協定大学の学部授業を通じて専門分野の知識を深め、フィールドワークを通じて研究基盤を構築するための学修活動を行う。3年次には、各専門分野に対応した領域別履修体系の主要授業科目を重点的に履修し、研究ゼミでは「韓国語専門セミナーA」「韓国語専門セミナーB」を履修して、専門分野の研究を具体化・深化させる。4年次には、「韓国語特別セミナーA」「韓国語特別セミナーB」を履修し、各自が選定した専門分野の研究を極め、4年間の学修活動の集大成として「卒業研究」を完成させる。

(2) 専門分野の履修体系と主要授業科目の設定

韓国学部韓国語学科の専門分野となる「韓国語」「韓国文化」「韓国事情」「韓国語教育」の各領域別履修体系の主要授業科目の編成は、以下のように設ける。

<韓国語(韓日対照言語、韓日翻訳・通訳)領域別履修体系>

本領域別履修体系は、韓国語(韓日対照言語、韓日翻訳・通訳分野)を積極的に学ぶことを推奨しており、学生は各年度に定められた領域別の科目群を計画的に履修する。

【1年次】

学部コア科目6科目(12 単位)、専門基礎科目の韓国語科目群8科目(14 単位)、韓国事情の2科目(4 単位)を必修として履修する。また、資格関連科目の「TOPIK 分析A」「TOPIK 分析B」も選択必修科目として履修する。さらに、専門基礎科目の韓国社会と文化および韓国語教育の科目群では、「韓国語教育A」「韓国語教育B」を主要授業科目として履修し、合計 16 単位を修得する。

【2年次】

「現地調査A(韓国)」「現地調査B(韓国)」を必修科目として履修し、韓国留学においては韓国語(韓日対照言語、韓日翻訳・通訳)に関する科目を積極的に履修する。

【3年次】

専門応用科目の韓国語科目群では、「韓国語学概論A」「韓国語学概論B」「韓日翻訳演習」「日韓翻訳演習」「韓日通訳演習」「日韓通訳演習」を主要授業科目として履修し、合計 12 単位を修得する。また、韓国の社会と文化の科目群では、12 単位を選択必修として履修する。さらに、3年次の研究ゼミナールでは、韓国語(韓日対照言語、韓日翻訳・通訳)に関する研究をテーマとし、「韓国語専門セミナーA」「韓国語専門

セミナーB」を履修して専門分野の研究を深める。

【4年次】

4年次研究ゼミナールでは、韓国語(韓日対照言語、韓日翻訳・通訳)に関する研究をテーマとし「韓国語特別セミナーA」「韓国語特別セミナーB」を履修し研究を極め、4年間の学修活動の集大成として「卒業研究」を完成する。

＜韓国文化(韓日文化比較、文化コンテンツ)領域別履修体系＞

本領域別履修体系は、韓国文化(韓日文化比較、文化コンテンツ)を積極的に学ぶことを推奨しており、学生は各年度に定められた領域別の科目群を計画的に履修する。

【1年次】

学部コア科目6科目(12単位)、専門基礎科目の韓国語科目群8科目(14単位)、韓国事情の2科目(4単位)を必修科目として履修する。また、資格関連科目の、「TOPIK 分析A」「TOPIK 分析B」を選択必修科目として履修する。さらに、専門基礎科目の韓国社会と文化および韓国語教育に関する科目群では、「韓国文化コンテンツ概論」「韓国現代文化」「韓国現代文学」を主要授業科目として履修し、合計 16 単位を修得する。

【2年次】

「現地調査A(韓国)」「現地調査B(韓国)」を必修科目として履修し、韓国留学においては韓国文化(韓日文化比較や文化コンテンツ)に関する科目を積極的に履修する。

【3年次】

専門応用科目の韓国語科目群では 12 単位を選択必修科目として履修する。

また、韓国の社会と文化の科目群では、「韓日文化対比論」「韓国文化コンテンツ批評」「コンテンツの理論と実践」「韓国伝統文化」を主要授業科目として履修し、合計 12 単位を修得する。さらに、研究ゼミナールでは、韓国文化(韓日文化比較、文化コンテンツ)に関する研究をテーマとし、「韓国語専門セミナーA」「韓国語専門セミナーB」を履修し専門分野の研究を深める。

【4年次】

4年次研究ゼミナールでは、韓国文化(韓日文化比較、文化コンテンツ)に関する研究をテーマとし「韓国語特別セミナーA」「韓国語特別セミナーB」を履修し研究を極め、4年間の学修活動の集大成として「卒業研究」を完成する。

＜韓国事情(韓国の諸事情 国際関係)領域別履修体系＞

本領域別履修体系は、韓国事情(韓国の諸事情、国際関係)を積極的に学ぶことを推奨しており、学生は各年度に定められた領域別の科目群を計画的に履修する。

【1年次】

学部コア科目6科目(12単位)、専門基礎科目の韓国語科目群8科目(14単位)、韓国事情の2科目(4単位)を必修科目として履修する。また、資格関連科目の「TOPIK 分析A」「TOPIK 分析B」を選択必修科目として履修する。さらに、専門基礎科目の韓国社会と文化および韓国語教育の科目群では、「韓国と国際社会A」「韓国と国際社会B」「韓国現代社会」を主要授業科目として履修し、合計 16 単位を修得する。

【2年次】

「現地調査A(韓国)」「現地調査B(韓国)」を必修科目として履修し、韓国留学においては韓国事情(韓国の諸事情や国際関係)に関する科目を積極的に履修する。

【3年次】

専門応用科目の韓国語科目群の「韓国語時事討論演習A」「韓国語時事討論演習B」を主要授業科目として履修し、合計 12 単位を修得する。また、専門応用科目の韓国の社会と文化の科目群では、「東アジア関係論A」「東アジア関係論B」「韓国伝統思想」を主要授業科目として履修し、合計 12 単位を修得する。さらに、研究ゼミナールでは、韓国事情(韓国の諸事情や国際関係)に関する研究をテーマとし、「韓国語専門セミナーA」「韓国語専門セミナーB」を履修して専門分野の研究を深める。

【4年次】

4年次研究ゼミナールでは、韓国事情(韓国の諸事情、国際関係)に関する研究をテーマとし「韓国語特別セミナーA」「韓国語特別セミナーB」を履修し研究を極め、4年間の学修活動の集大成として「卒業研究」を完成する。

<韓国語教育領域別履修体系>

本領域別履修体系は、韓国語教育を積極的に学ぶことを推奨しており、学生は各年度に定められた領域別の科目群を計画的に履修する。

【1年次】

学部コア科目6科目(12 単位)、専門基礎科目の韓国語科目群8科目(14 単位)、韓国事情の2科目(4単位)を必修科目として履修する。また、資格関連科目の「TOPIK 分析A」「TOPIK 分析B」を選択必修科目として履修する。さらに、専門基礎科目の韓国社会と文化および韓国語教育に関する科目群では、「韓国語教育A」「韓国語教育B」「韓国現代文化」を主要授業科目として履修し、合計 16 単位を修得する。

【2年次】

「現地調査A(韓国)」「現地調査B(韓国)」を必修科目として履修し、韓国留学においては韓国語教育に関する科目を積極的に履修する。

【3年次】

教育科目の「韓国語科教育法1」「韓国語科教育法2」「韓国語科教育法3」「韓国語科教育法4」を主要授業科目として履修し、また専門応用科目の韓国語の科目群では、「韓国語学概論A」「韓国語学概論B」「韓国語表現演習」「韓国語作文演習」を含めて 12 単位を履修する。また、専門応用科目の韓国の社会と文化の科目群では、「韓国伝統文化」を主要授業科目として履修し、合計 12 単位を修得する。資格関連科目の「検定韓国語演習」については選択必修科目として履修し、研究ゼミナールでは韓国語教育に関する研究をテーマに、「韓国語専門セミナーA」「韓国語専門セミナーB」を履修して専門分野の研究を深める。

【4年次】

教育科目の「韓国語教育史」「韓国語教育実習」を主要授業科目として履修し、また研究ゼミナールでは、韓国語教育に関する研究をテーマに、「韓国語特別セミナーA」「韓国語特別セミナーB」を履修して研究を極め、4年間の学修活動の集大成として「卒業研究」を完成する。

3) 授業期間と単位時間数設定の考え方

(1) 一年間の授業期間や各授業科目の授業期間について

本学では、春学期(4月 1 日～9月 30 日)、秋学期(10 月 1 日～翌年3月 31 日)の2学期制を採用しており、授業期間は春学期と秋学期をあわせて年間 35 週とすることを学則に定め、適切な授業実施期間を設定

している。

(2) 単位時間数について

本学における授業科目の単位算定は、その授業の形態(講義・演習・実習)に基づいて定めている。具体的には、以下の通りである。

講義・演習科目については、1単位を取得するためには、原則として 15 時間から 30 時間の授業時間が必要である。

実験・実習・実技科目については、1単位を取得するためには、原則として 30 時間から 45 時間の授業時間が必要である。

授業時間は、1時限あたり 90 分(ただし、学科や年度によって調整される場合がある)とし、通常は 15 週から 16 週の期間にわたり実施される。

学修時間(授業時間に加え、予習・復習を含む事前・事後学習)の考え方として、1単位の取得には教室内での授業時間だけでなく、教室外での予習や復習といった事前・事後学習も含まれるものとする。具体的には、1単位の学修時間の例として、教室での授業(15～30 時間)に加え、準備・復習(30～15 時間)を合わせた合計で約 45 時間とする。これに満たない場合、自主的な学習(課題やレポート作成等)により補う。

5 教育方法、履修指導方法及び卒業要件

1) 授業の方法、指導方法、受講人数、配当年次

(1) 授業方法と教育手法

韓国学部韓国語学科の授業は、講義及び演習を基本とし、初学修者から既修者までの多様な学力層に対し、個々の習得状況に応じた段階的な能力伸長を目的として、以下の教育手法を導入する。

<習熟度別編成の導入>

入学直後に実施するプレイスメントテストの結果に基づき、学生を4つの習熟度別クラスに編成する。これにより、個々の習熟度に合致した最適な学修環境を提供し、学修効果の最大化を図る。

<ネイティブ教員による全人格的指導>

韓国語の基礎4技能(読む、書く、聞く、話す)を網羅する週7コマ(計 630 分)の科目は、すべてネイティブスピーカーの教員が担当する。社会情勢や文化背景を通じ、発音の微細な差異や特有のニュアンスまで網羅した、留学やビジネスに耐えうる「実用的な言語運用能力」を教授する。

<多文化共生による実践教育>

教員の指導・管理の下、韓国からの交換留学生との日常的な交流プログラムを組織し、正課授業で得た知識を即座に実践に転じる機会を確保する。

(2) 履修指導方法

学生が主体的に学修計画を策定し、円滑に卒業要件を充足できるよう以下の指導を行う。

<留学支援と一貫した指導>

留学準備から帰国後の専門課程への円滑な接続を図るため、クラス担任や専門教員による個別的な履修相談体制を整備する。

＜セメスター制度の活用＞

柔軟な履修を可能とするセメスター(学期)単位での科目配当を行い、学生が自身の学修目標に応じた履修計画を柔軟に構築できるよう指導する。

(3)受講人数

少人数教育を基軸とし、教育の質保証と学生一人ひとりの発言機会を担保する。

＜少人数クラスの徹底＞

韓国語教育科目を中心に、教員と学生の双方向的なコミュニケーションが可能となる少人数編成を維持する。

＜密接な指導体制の構築＞

学生と教員の距離が近い教育環境を構築することで、学生個々の学習進度や課題を教員がより精緻に把握し、対話型授業を通じたきめ細かな個別指導を実現する。

(4)配当年次

4年間の一貫した学修プロセスを段階的に設計し、語学力の向上と専門性の深化を両立させる。

＜低年次(1・2年次)＞

基礎固めの期間と位置付け、集中講義形式による語学基礎科目を重点的に配当する。早期に留学に耐えうる語学水準を構築する。

＜中・高年次(2・3年次)＞

語学の実践および異文化理解の深化を目的とし、交換留学やD.D.(デュアル・ディグリー)制度等の海外派遣科目を配当する。

＜高年次(3・4年次)＞

留学経験を経て培われた高度な語学力を基盤に、より専門性の高い学問領域(韓国の文化、社会、経済等)を攻究する発展科目を配当し、学修の集大成を図る。

2) 卒業要件、履修モデル、卒業研究、成績評価、CAP制

(1)卒業要件

韓国学部韓国語学科は、ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、設定したカリキュラムに基づいて、卒業に必要な単位は合計 124 単位とし、以下の科目群を修得することを要件とする。

＜共通科目＞

共通科目として 28 単位以上の修得を義務付けており、その内訳は必修 10 単位、選択 18 単位とする。28 単位を超えて修得した単位は自由選択科目として扱われ、学生の興味や進路に応じた学びの幅を広げる。

＜専門教育科目＞

専門教育科目として 90 単位以上の修得を求めており、その内訳は必修 42 単位、選択必修 42 単位、選択6単位とする。選択必修科目の内訳は、専門基礎科目(韓国社会と文化・韓国語教育)から 16 単位以上(韓国留学1～4を含む)、専門応用科目からは韓国語科目(韓国留学5～8を含む)から 12 単位以上、さらに韓国社会と文化科目(韓国留学9～12を含む)から 12 単位以上、資格関連科目として2単位を修得する必要がある。

＜自由選択科目＞

自由選択科目として6単位の修得を義務付けており、これらを含めた合計124単位の修得をもって卒業要件とする。

(2) 履修モデル

領域別履修体系に基づく、本カリキュラムの履修モデルを以下のように示す。

<韓国語(韓日対照言語、韓日翻訳・通訳)領域別履修体系(資料3_①)>

本履修モデルにおいては、所定の科目・単位取得により「学士(韓国語)」を取得することができる。

韓国語運用能力の高度化をベースに、日韓両国で活躍するビジネスパーソン、韓国系企業の日本人、または韓国との取引がある国内企業でのキャリアを目指す学生の育成を目的とした履修モデルとなっている。

1年次に、学修の基礎力形成にあたり、アカデミックスキルズにおける「スタートアップセミナー」「ベーシックセミナー」を通じて大学での学習方法や文章作成力、発表力を身につける。一方で、専門基礎科目韓国語科目群の8科目を中心に語学を集中的に学び、それに加え、「韓国学入門」や「韓国現代社会」を履修し、ビジネスの土台となる言語力と基礎知識を養う。

2年次には、韓国文化・社会の理解に重点を置き、全員が韓国へ留学することにより、韓国文化・社会を肌で体験し、3年次以降の専門分野の研究への深化へとつなげ、併せて生きた言語感覚を養う。

3年次以降は専門深化の段階であり、「韓国留学」を経て興味・関心を持った分野について、「韓国語専門セミナーA・B」「韓国語特別セミナーA・B」を通じて研究テーマとして取り扱う。また、専門分野の発展科目「韓国語学概論A・B」などを履修することで、自身の研究テーマについて多角的な視点考察し、同時に問題解決する能力も養う。

併せて「韓日通訳演習」「日韓通訳演習」「韓日翻訳演習」「日韓翻訳演習」などの主要授業科目を履修することにより、現場で求められる精緻な言語変換能力を習得する。

これらの学びを通じて、韓国系企業やグローバルなビジネスシーンにおいて、通訳・翻訳スキルを武器に即戦力として活躍できる高度な職業人としての素養を身につける。

<韓国文化(韓日文化比較、文化コンテンツ)領域別履修体系(資料3_②)>

本履修モデルにおいては、所定の科目・単位取得により「学士(韓国語)」を取得することができる。

韓流コンテンツや韓国現代文学を軸に、伝統から現代に至る韓国文化を深く考察し、エンターテインメント業界や文化発信を担うキャリアを目指す学生の育成を目的とした履修モデルとなっている。

1年次に、学修の基礎力形成にあたり、アカデミックスキルズにおける「スタートアップセミナー」「ベーシックセミナー」を通じて大学での学習方法や文章作成力、発表力を身につける。一方で、専門基礎科目韓国語科目群の8科目を中心に語学を集中的に学び、それに加え、「韓国文化コンテンツ概論」や「韓国現代文化」、「韓国現代文学」を履修し、伝統から現代に至る韓国文化について、学術的な視点から多角的に考察する基礎を養うとともに、文化現象の背景にある社会や歴史的な文脈を読み解く洞察力を身につける。

2年次には、韓国文化・社会の理解に重点を置き、全員が韓国へ留学することにより、韓国文化・社会を肌で体験し、3年次以降の専門分野の研究への深化へとつなげ、併せて生きた言語感覚を養う。

3年次以降は専門深化の段階であり、「韓国留学」を経て興味・関心を持った分野について、「韓国語専門セミナーA・B」「韓国語特別セミナーA・B」を通じて研究テーマとして取り扱う。また、専門分野の発展科目「韓国伝統文化」「韓日対比文化論」などを履修することで、伝統と現代を融合させた深い洞察力を養う。

併せて「韓国文化コンテンツ批評」や「コンテンツ企画の理論と実践」などの主要授業科目を履修することに

より、韓国文化コンテンツの背景にある歴史や理論などを理解し、国際社会へ発信できる文化的な架け橋となる人材の育成を目指す。

<韓国事情(韓国の諸事情 国際関係)領域別履修体系(資料3_③)>

本履修モデルにおいては、所定の科目・単位取得により「学士(韓国語)」を取得することができる。

「韓国現代社会」や「韓国と国際社会」に重点を置き、政治・経済・外交の観点から韓国を分析する。国際協力や行政、報道など、日韓の関係性を客観的に捉え、発信する役割を担うキャリアを目指す学生の育成を目的とした履修モデルとなっている。

1年次に、学修の基礎力形成にあたり、アカデミックスキルズにおける「スタートアップセミナー」「ベーシックセミナー」を通じて大学での学習方法や文章作成力、発表力を身につける。一方で、専門基礎科目韓国語科目群の8科目を中心に語学を集中的に学び、それに加え、「韓国現代社会」、「韓国と国際社会」の履修を通じて、日韓関係や北東アジアの情勢を客観的かつ批判的に分析する視点を養う。

2年次には、韓国文化・社会の理解に重点を置き、全員が韓国へ留学することにより、韓国文化・社会を肌で体験し、3年次以降の専門分野の研究への深化へとつなげ、併せて生きた言語感覚を養う。

3年次以降は専門深化の段階であり、「韓国留学」を経て興味・関心を持った分野について、「韓国語専門セミナーA・B」「韓国語特別セミナーA・B」を通じて研究テーマとして取り扱う。また、専門分野の発展科目「韓国語時事討論演習A・B」の履修を通じて、韓国の政治・経済・社会における最新の諸課題を分析する力を養う。

併せて「韓国伝統思想」や「東アジア関係論A・B」などの主要授業科目を履修することにより、韓国社会の倫理観や行動様式の根源にある思想的背景を深く理解するとともに、日本や中国を含む東アジア全体の中で韓国を相対化して捉える分析力を養うことにつながり、韓日相互理解に基づいた政策提言や文化交流を主導できる人材の育成を目指す。

<韓国語教育領域別履修体系(資料3_④)>

本履修モデルにおいては、所定の科目・単位取得により「学士(韓国語教育)」を取得することができる。

韓国語学習指導者の養成、日本国内外での韓国語教育者育成、教育理論・教授法・実習による体系的習得を目的とした履修モデルとなっている。

1年次に、学修の基礎力形成にあたり、アカデミックスキルズにおける「スタートアップセミナー」「ベーシックセミナー」を通じて大学での学習方法や文章作成力、発表力を身につける。一方で、専門基礎科目韓国語科目群の8科目を中心に語学を集中的に学び、それに加え、教育の基礎となる導入段階として、「韓国語教育A・B」や「韓国現代文化」、「TOPIK 分析A・B」などを通じて韓国語教育の理論的基礎を学ぶ。

2年次には、韓国文化・社会の理解に重点を置き、全員が韓国へ留学することにより、韓国文化・社会を肌で体験し、3年次以降の専門分野の研究への深化へとつなげ、併せて生きた言語感覚を養う。

3年次は専門深化の段階であり、「韓国留学」を経て興味・関心を持った分野について、「韓国語専門セミナーA・B」を通じて研究テーマとして取り扱う。併せて「韓国語学概論A・B」、「韓国語表現演習」、「韓国語作文演習」、「韓国語教育史」、「検定韓国語演習」を履修することにより、言語構造の理解と教育応用力を強化する。

最後の4年次には実践段階として、「韓国語教育実習」を必修とし、実際の教育現場での指導経験を積む

とともに、「卒業研究」や「韓国語特別セミナーA・B」を通じて指導力を完成させる。

この系統は、教育理論から教授法、実習へと明確な段階構造を持ち、体系的なカリキュラムにより必修科目を多く設定している。これにより、「教える専門家」の養成を目的とした、教育実習を重視した構成となっている。

(3) 卒業研究

韓国学部韓国語学科では、3・4年次において、学生が自主的に研究テーマを選定し、多様な分野(韓国学、比較文化論、韓日翻訳、韓国語教育学、対照言語学、韓国語検定対策研究など)について「韓国語専門セミナーA・B」「韓国語特別セミナーA・B」のゼミナール活動を通して取り組む。これらはそれぞれの教育内容と大学設置基準第21条に基づき1単位とする。これにより、学生は自身の興味や関心に基づいた深い学びを進め、専門的な知識と実践的な技能を養う。

卒業年次には、これまでの学修の集大成として、各自が選定したテーマに基づき、「卒業研究」(卒業論文または卒業制作としての翻訳など)を完成させることを学修目標とする。「卒業研究」は、研究の計画立案、実施、分析、報告までの一連のプロセスを十分に行う上での学習時間と教育の質の確保、学習成果の評価基準の観点及び大学設置基準第21条に基づき、4単位を設定する。

「卒業研究」の進行スケジュールとして、4月に卒業研究計画書を提出し、7月には中間発表会を実施する。続いて、12月に卒業研究の完成・提出を行い、1月に合否判定と卒業研究発表会を実施する。最終的な成績評価も同月に行われ、学生は各ゼミにおいて進捗状況を報告し、質疑応答を通じて研究の質を高める。

以上のような体系的な取り組みにより、学生は自らの研究を深めるとともに、他者に向けてその成果を効果的に伝える能力を養うとともに、専門的な知識と実践的なスキルを兼ね備えた人材へと成長することを目的とする。

(4) 成績評価

韓国学部韓国語学科は、教育活動の改善に役立てるため、学生の学修成果を可視化し、卒業認定・学位授与の方針(DP)、教育課程編成・実施の方針(CP)、入学者の受け入れの方針(AP)が適切に運用されていることを確認し、学修の達成状況について点検・評価を行っている。点検・評価の方法としては、まず全学レベル、学位プログラムレベル、授業レベルでの評価を実施し、特に学位プログラムレベルの評価については、学科ごとにアセスメント・ポリシーを定めて行う。教員は科目の成績評価を通じて学修成果を評価し、その際には評価の方法や観点、基準をシラバスに明示した上で、厳格に評価を行う。また、入学時、在学中、卒業時には学生自身による学修成果や学修行動についての主観的評価も行っている。能力面の評価には標準化された客観テストを用い、必要に応じて学部・学科の育成目的に沿った能力試験や資格取得状況も評価対象に含める。入学前の教育成果の検証に努めるとともに、卒業後の調査も実施し、教育成果の把握に役立てている。これらの学修成果をもとに、教育課程や授業計画、教育方法の改善を図り、教員も授業改善を通じて適切な学修成果が得られるよう努めている。

各科目の具体的な学業成績評価においては、GPA(Grade Point Average)を採用している。GPAは併せて学内・学外奨学金及び就職等の選考資料としても活用する。学業成績は授業計画(シラバス)に示した評価方法に従い、以下の通りS・A・B・C・D・Nの6段階で評価する。S～C・Nが合格(単位認定)、Dが不合格(単位不認定)とする。(資料4)

評価基準は以下のとおり

S = 特に秀でた学生(総履修者の概ね 10%を限度とする)

A = 100 点～80 点

B = 79 点～70 点

C = 69 点～60 点

D = 59 点以下

(5)履修科目の年間登録上限(CAP 制)

本学ではカリキュラム上の授業科目に対して、学生が適切な学習時間を確保し、バランスの取れた学修を促進することを念頭に、履修単位数の上限(CAP制)を設けている。これにより過剰な履修を防ぎ、学習効果の最大化と持続可能な学修環境の維持を目指す。

本学における履修科目登録単位数の上限は1学期につき原則 24 単位(留学科目は除く)としている。韓国学部韓国語学科においても2年次から4年次については登録単位数上限を1学期につき 24 単位とする。

一方、韓国学部韓国語学科1年次の登録上限単位数を年間で 56 単位と設定した。これは、本学他学部(人間学部人間福祉学科や子ども学科)で導入している特定年次生の上限緩和に倣ったもので、韓国学部では2年次からの1年間(または2年間)にわたる海外留学を強く推奨することに対応したものである。留学前の限られた期間内(1年次の間)に教養教育科目を網羅的に履修するとともに、主要な専門科目について単位修得することによって留学希望者の円滑な学修計画の遂行を担保するためである。

この点を除き、履修単位数の上限(CAP制)による履修指導は以下のとおり、本学他学部と同条件で実施する。

- ・2 年次以降の履修登録を行う学期以前の通算のGPAが 3.00 を超える学生に関しては、1学期についての履修上限単位数を 25 単位とする。

- ・履修登録を行う学期以前の通算のGPAが 1.00 未満の学生に関しては、1学期についての履修上限単位数を 22 単位とする。

- ・4年次において、特に本学部長が認めた場合には、履修登録単位数の上限を 28 単位とすることができる。

6 多様なメディアを高度に利用して、授業を教室以外の場所で履修させる場合の具体的な計画

1)実施方法と履修に関する規定

韓国学部韓国語学科のメディア授業とは、全授業回又は一部の授業回において、インターネット等を利用して、文字、音声、静止画、動画等の多様な情報を一体的に扱うもので、2007 年文部科学省告示第 114 号(2001 年文部科学省告示第 51 号の一部改正、2008 年4月1日施行)において定められている次に掲げるいずれかの要件を満たし、対面授業に相当する教育効果を有すると認められるものをいう。

- ①同時かつ双方向に行われるものであって、かつ、当該授業を行う教室等以外の教室、研究室又はこれらに準ずる場所(以下「教室等以外の場所」という。)において履修させるもの(同時双方向型)

- ②前号以外で、授業の実施に当たって、指導補助者が教室等以外の場所において学生 等に対面することにより、又は当該授業を行う教員若しくは指導補助者が当該授業の終了後すみやかにインターネットそ

の他の適切な方法を利用することにより、設問解答、添削指導、質疑応答等による十分な指導を併せ行うものであって、かつ、当該授業に関する学生等の意見の交換の機会が確保されているもの(オンデマンド型)

※出典:「東京外国語大学における多様なメディアを高度に利用して行う授業に関する要項」(改正 令和6年3月26日規則第48号)

本学では、卒業に必要な単位数(124単位)のうち、メディア授業により修得可能な単位数の上限は60単位までとすることを目白大学学則で定めている。

2) メディア授業の科目と類型

韓国学部韓国語学科では、メディア授業の類型を①同時双方向型(テレビ会議方式等 ※メディア授業告示第1号)、②オンデマンド型(インターネット配信方式等 ※メディア授業告示第2号)及び③ハイブリッド型(対面授業+①同時双方向型)に分類して実施する。

＜①同時双方向型：「現地調査A(韓国)」「現地調査B(韓国)」＞

韓国学部韓国語学科の学生は2年次に希望者全員が韓国の協定大学に1年間交換留学または2年間デュアル・ディグリー留学に参加することになる。留学中に、留学先となる協定大学の正規授業の他にフィールドワークの実践として、2年次の春学期に「現地調査A(韓国)」、秋学期に「現地調査B(韓国)」を必修科目として履修することになる。オンライン(Zoom)参加等による同時双方向型で15回授業を行う。それぞれの科目の履修方法等の詳細については、シラバスに提示し、履修説明会にて案内し、1年次に「フィールドワーク入門」を履修しなければならない。

＜②オンデマンド型：「韓国思想史」「韓国伝統思想」「韓国語科教育法1」「韓国語科教育法2」＞

Google Classroom(または schooswing)によるオンデマンド型授業として15回行う。毎回コンテンツとして授業補助資料(PDFファイル等)を提示し授業動画(30分程度)を期間限定で公開し、受講後は期限までにGoogle フォーム等で課題を提出する。授業内容についての質問および課題についてのコメントはGoogle Classroom の限定コメント、メール等で回答する。出席は受講後の課題提出をもってカウントし、10回以上の受講者を評価対象とし、評価は15回分の課題をまとめて評価する。

＜③ハイブリッド型：「韓国語専門セミナーA」「韓国語専門セミナーB」＞

3年次生の科目「韓国語専門セミナーA」「韓国語専門セミナーB」は対面で授業を行うが、3年次にデュアル・ディグリー留学(2年目)に参加する学生はZoom参加等による同時双方向型で授業(15回)を履修することができる。つまり、ハイブリッド型授業となる。それぞれの科目の履修方法等の詳細については、シラバスに提示し、履修説明会にて案内する。

7 海外語学研修等の学外学修を実施する場合の具体的計画

1) 韓国学部韓国語学科の学外学修の概要

韓国学部韓国語学科では、外国語としての韓国語及び韓国学全般を専門分野としていることから、韓国現地での学外学修に積極的に取り組むようカリキュラムに韓国留学及び現地調査の科目を編成している。具体的には、2年次に原則全員留学(1年間の交換留学または2年間のデュアル・ディグリー留学)に参加し、韓国の協定大学の学部授業を通して関心分野の専門知識を修得できるようにし、また留学中に韓国学全般の専門分野の中で学生自らが関心分野の研究テーマについて専門知識の修得のための現地調査を積極的に行うよう必修科目として設定している。

韓国学部韓国語学科の学外学修への取り組みは、研究の対象となる韓国語及び韓国学全般について学生が主体的な学修活動を通して専門分野の知識を獲得し、専門分野の知見を深めることはもちろん、留学生活を通して自己管理能力、コミュニケーション力、協調性、問題解決力等を伸ばし、実社会における課題発見・解決能力の基礎を形成することを目指す。

2) 学外学修科目の履修体系と要件

韓国学部韓国語学科では、学外学修科目として留学科目「韓国留学1～12」と現地調査「現地調査A(韓国)」「現地調査B(韓国)」を設けている。

韓国学部韓国語学科の学外学修科目の履修は、2年次に原則全員留学(1年間の交換留学または2年間のデュアル・ディグリー留学)に参加することが前提となるため、1年次に協定大学の留学要件となる韓国語能力試験(TOPIK)3級以上に到達できるよう韓国語基礎科目(8科目)を必修科目として履修し、留学生活に必要な基礎知識を身につけ留学先となる協定大学の学修環境と生活環境等を理解できるよう1年次に「韓国事情A(総合)」「韓国事情B(総合)」を必修科目として履修する必要がある。

また現地調査の「現地調査A(韓国)」「現地調査B(韓国)」の履修にあたっては、1年次の学部コア科目の「フィールドワーク入門」の履修を通じて、調査の計画立案、調査方法、フィールドワークにおける実施と注意点等を修得していることを前提条件とする。

以上のように、本学部学科の2年次の学外学修科目の「韓国留学1～12」と「現地調査A(韓国)」「現地調査B(韓国)」を履修するには、1年次の韓国語基礎科目(8科目)、「韓国事情A・B(総合)」「フィールドワーク入門」の学修を通して一定の要件を満たすことが求められる。一方、2年次の学外学修科目の「韓国留学1～12」と「現地調査A(韓国)」「現地調査B(韓国)」を含む専門分野の学修成果と関心分野に基づき3年次以降の研究ゼミを選定し研究対象を具体化しなければならない。

3) 学外学修先についての考え方

本学部学科の学外学修先は、本学が協定を締結している韓国の教育機関とその所在地を基本とする。具体的には、1年間の交換留学または2年間のデュアル・ディグリー留学が可能な韓国の協定大学(下表)を主な拠点とし、その周辺の博物館、遺跡、文化施設、産業現場、映画・ドラマ撮影地等を調査対象地として選定させる。学生が各自の関心分野に基づき、最適な調査地点を選択できるよう配慮する。

(韓国の協定大学一覧)

	協定校名	英語表記	設置区分	所在地
1	韓瑞大学校	Hanseu University	(私立)	忠清南道瑞山市
2	湖南大学校	Honam University	(私立)	光州広域市
3	蔚山大学校	University of Ulsan	(私立)	蔚山広域市
4	慶熙大学校	Kyung Hee University	(私立)	ソウル特別市 京畿道水原市
5	昌信大学校	Changshin University	(私立)	慶尚南道昌原市
6	金剛大学校	Geumgang University	(私立)	忠清南道論山市
7	高麗大学校	Korea University	(私立)	ソウル特別市
8	済州大学校	Jeju National University	(国立)	済州特別自治道
9	ソウル女子大学校	Seoul Women's University	(私立)	ソウル特別市
10	嘉泉大学校	Gachon University	(私立)	京畿道城南市
11	東国大学校	Dongguk University	(私立)	ソウル特別市 慶尚北道慶州市
12	培材大学校	Pai Chai University	(私立)	大田広域市
13	韓外国語大学校	Hankuk University of Foreign Studies	(私立)	ソウル特別市 京畿道龍仁市
14	江原大学校	Kangwon National University	(国立)	江原道春川市
15	釜山大学校	Pusan National University	(国立)	釜山広域市
16	南ソウル大学校	Namseoul University	(私立)	忠清南道天安市
17	延世大学校	Yonsei University	(私立)	ソウル特別市
18	梨花女子大学校	Ewha Womans University	(私立)	ソウル特別市
19	三育大学校	Sahmyook University	(私立)	ソウル特別市

4) 学外学修先の確保の状況

韓国学部韓国語学科の学外学修先として、本学が協定を締結している韓国の協定大学に派遣枠を確保している。具体的には、韓国の協定大学に1年間の交換留学と2年間のデュアル・ディグリー留学が可能な枠を合わせて 80 名分以上の派遣枠を確保している。現地調査の学外学修先は、派遣先となる協定大学の所在地や学生の調査テーマに基づき設定するが、現地調査が安全かつ円滑に実施できるよう指導体制を整えている。

5) 学外学修へのサポート体制

(1) 留学科目「韓国留学1～12」

2年次での1年間の交換留学または2年間のデュアル・ディグリー留学の派遣と受入については本学と協定大学との協力体制でサポートすることを基本とする。具体的には、本学部学科の派遣学生に対しては留

学前・留学中・留学後の3回に指導を分け、関連科目の担当教員とクラス担当教員が連携し、本学と協定大学の事務局間の協力体制でサポートする。

<留学前の指導等>

韓国事情の「韓国事情A(総合)」「韓国事情B(総合)」において、2年次での1年間の交換留学または2年間のデュアル・ディグリー留学についてガイダンスし、協定大学別の協定枠と派遣枠、協定大学別の学修環境と生活環境の基本情報を提供し、派遣先選考結果に基づき協定大学別の学修環境と生活環境の詳細についての情報収集、出願手続きをサポートする。またクラス担当教員は派遣先の学修計画書立案(学修目標・履修計画)の作成等を指導する。なお、安全確保のための海外留学保険の説明会と加入、危機管理講習会と課題提出、誓約書による注意事項の指導を徹底する。

<留学中の指導等>

クラス担当教員が留学中の学生を対象に ICT を活用して定期的に遠隔指導を行い、学修と生活をサポートする。留学中の体調不良やトラブルについてはクラス担当教員、派遣先別リーダー学生、本学の事務局、協定大学の事務局と教員の連携体制でサポートする。また緊急時は危機管理マニュアルに基づき対応し、学科教員3名が派遣要員として対応する。

<留学後の指導等>

留学中の学修活動と課外活動について振り返り、学修成果を報告書として提出し発表する。協定大学で修得した単位の認定について「単位認定(互換)説明会」を開催し、単位認定手続きを行い、教授会の審議により本学の単位として認定する。

(2) フィールドワーク科目「現地調査A(韓国)」「現地調査B(韓国)」

2年次の1年間の交換留学または2年間のデュアル・ディグリー留学の際に、派遣先となる協定大学の学部授業以外の学外学修としての現地調査は、科目担当教員と少人数編成となるクラス担当教員との連携体制でサポートする。

<実施前の事前指導>

1年次の「フィールドワーク入門」において、フィールドワークの目的、基本的技法、アンケート調査法、統計活用の基礎、レポート作成法、および現地調査における注意点(安全管理・倫理等)を徹底して指導する。現地調査の「現地調査A(韓国)」と「現地調査B(韓国)」の調査テーマおよび計画書についてはクラス担当教員が指導する。

<実施中の指導と管理>

現地調査の「現地調査A(韓国)」と「現地調査B(韓国)」は前期と後期に分けて遠隔授業として実施する。それぞれの科目は、科目担当教員がガイダンス、中間点検、報告書の回収と管理等を担当し、クラス担当教員が調査テーマの選定、計画書立案、進捗状況の確認と個別指導等を担当する。

<実施後の指導と管理>

クラス担当教員は学生が調査テーマおよび計画書に沿って主体的かつ計画的に調査活動を進めているかを確認する。また、報告会を開催し報告書の作成と発表を通して学修成果を点検し評価を行う。そして、3年次以降の研究ゼミナールにおける研究活動につながるよう指導する。

6) 学外学修の単位認定

<留学科目「韓国留学1～12」>

1年間の交換留学では留学韓国の協定大学で修得した単位を本学の単位として 48 単位を上限に認定する。留学科目以外に個別科目として認定することもある。

2年間のデュアル・ディグリー留学では韓国の協定大学で修得した単位を本学の単位として 60 単位を上限に認定する。留学科目以外に個別科目として認定することもある。

<フィールドワーク科目「現地調査A(韓国)」「現地調査B(韓国)」>

「現地調査A(韓国)」は2年次前期の、また「現地調査B(韓国)」は2年次後期の必修科目として、それぞれ2単位を認定する。

7) 学外学修の成績評価

<留学科目「韓国留学1～12」>

韓国の協定大学で修得した単位を本学の単位として認定することから、成績評価は「N(認定)」と処理するが、協定大学が発行する成績表原本は本学および学生本人が保管することとする。

<フィールドワーク科目「現地調査A(韓国)」「現地調査B(韓国)」>

「現地調査A(韓国)」「現地調査B(韓国)」は以下の項目に基づき、担当教員が総合的に評価を行う。

- ・計画書:調査テーマの設定と事前準備の適切性
- ・日誌:現地調査の時間・実施方法・内容等の適切性
- ・分析・考察:収集した情報の整理と論理的な分析
- ・進捗状況の報告:現地調査の内容と成果についての中間発表の評価
- ・報告書:学術的な記述形式の遵守と成果の明瞭さ

8) 学外学修のプログラム(区分)の概要

<留学科目「韓国留学1～12」>

関心分野を中心に、「韓国留学1～4」は専門基礎科目の「韓国社会と文化」の科目群、「韓国留学5～8」は専門応用科目の「韓国語」の科目群、「韓国留学9～12」は専門応用科目の「韓国社会と文化」の科目群に相当する科目の履修を計画するよう指導する。

<フィールドワーク科目「現地調査A(韓国)」「現地調査B(韓国)」>

「現地調査A(韓国)」は、現地における生活文化及び諸事情に関する調査テーマを選定し、実態調査を行う。「現地調査B(韓国)」は、現地の歴史・文化施設(博物館、遺跡、伝統的建造物等)の特色についての実態調査、または特定の社会問題に対する意識調査(アンケートや取材による量的・質的調査)を行う。

9) 韓国における学外学修ができない場合の代替措置

本学部学科の学外学修は、2年次の1年間の交換留学または2年間のデュアル・ディグリー留学の際に留学科目とフィールドワーク科目の履修を原則とし、学生が韓国の社会と文化を体験しながら主体的に学修活動を行うことを基本方針とする。特に必修科目のフィールドワーク科目「現地調査A(韓国)」「現地調査B(韓

国)」は韓国における現地調査を強く推奨する。

一方で、経済的、精神的又は身体的理由、その他やむを得ない事情により2年次の1年間の交換留学または2年間のデュアル・ディグリー留学への参加が困難な学生は、長期夏期休暇中または長期春期休暇中に実施される短期プログラムに参加し学外学修の機会を確保することを推奨する。ただ渡航自体がやむを得ない事情により困難な場合に限り、日本国内における学外学修(オンラインプログラムを含む)活動を代替的措置として認める。

8 取得可能な資格

1)「外国語としての韓国語教育資格」に係る学位の授与

韓国学部韓国語学科においては、教育研究上の目的である「韓国語および韓国文化の専門知識を教えることができる人材」を養成するため、本学独自の「外国語としての韓国語教育資格(Teaching Korean as a Foreign Language)」を教育課程の特色として設けている。所定の要件を満たし、当該資格を取得することで、学位名称として「学士(韓国語教育)」を選択することが可能となり、学生は韓国語教育分野における専門性を明確化するとともに、多様な進路選択が可能となる。特に、韓国語教育を専門領域として明示した学士号を取得できる点は、他大学にもほとんど例のない特色であり、韓国学部の教育的独自性を示すものである。

この「学士(韓国語教育)」は、韓国語教育の理論と実践を体系的に修得したことを証明するものであり、以下の教育課程の履修を条件とする。

<教育科目の必修>

「韓国語科教育法1・2・3・4」や「韓国語教育 A・B」「韓国語学概論 A・B」などを体系的に履修し、基礎理論から授業構想力までを段階的に習得しなければならない。

<選択必修科目の修得>

「韓国語教育史」「TOPIK 分析 A・B」「韓国伝統文化」などから2単位以上を修得し、客観的な言語運用能力の証明を求める。

<韓国語教育実習の完遂>

4年次の必修科目として、教育現場における実践的指導力を高めるための「韓国語教育実習」への参加を必須とする。実習では、模擬授業や省察を通じて、独立した教育者としての資質を確立する。

2) 外部検定試験の合格支援(資格関連科目)

実用的韓国語運用能力を客観的に証明するため、以下の検定試験に対応した「資格関連科目」を設置し、合格に必要な能力を養成する。

<TOPIK(韓国語能力試験)>

韓国政府が主催する世界共通の検定試験において、中級レベル(3・4級)から上級レベル(5・6級)の合格を目指す「TOPIK 分析A・B」を設置し、自律的学習能力と高度な文章処理能力を養成する。

<ハングル能力検定>

日本国内で認知度の高いハングル能力検定上級合格を目標とした「検定韓国語演習」を設置し、語彙・文法の精密な理解と情報処理能力を高める。

9 入学者選抜の概要

1) アドミッション・ポリシー

韓国学部韓国語学科では、以下の資質・能力をもった学生を受け入れる。

- ①韓国語の学修と韓国文化や諸事情の理解を通じて、社会の発展に貢献していこうとする人
- ②韓国語・韓国文化・韓国語教育の学修に必要となる基礎的な知識と技能を身につけており、自らテーマを見だし学問として探究していこうとする人
- ③韓国を中心とする多様な背景を持つ他者と積極的に交流・協働しながら、国際的な視野で諸問題の解決に主体的に取り組もうとする姿勢を持つ人

このポリシーに基づき、志願者の「学力の3要素」を入学者の受け入れに関する方針に基づいて多面的・総合的に評価し、厳正公正な入学者選抜を実施する。

2) 入学者選抜方法

入学者の選抜に際しては、上記のアドミッション・ポリシーに基づき、以下に示す選抜方法にて入学試験を実施する。すべての入試区分において、「調査書」を活用し、多面的・総合的な評価を行う。

入学者選抜における実施については、韓国学部韓国語学科における入学者選抜の受入方針を踏まえたうえ行う。各試験区分の募集人員は、総合型選抜を20人、学校推薦型選抜を25人、一般選抜(全学部統一選抜を含む)を30人、大学入学共通テスト利用選抜を5人とする。

(1) 総合型選抜

一次選考では、エントリーシート、課題、調査書等の書類選考を行う。二次選考では、作文、プレゼンテーション、個別面接試験を組み合わせることで、学ぶ意欲・主体性・コミュニケーション能力・目的意識等を総合的に評価する。特に、本学部学科のアドミッション・ポリシーの適性を重点的に判定する。入学手続きをとった者に対しては、入学後の韓国語学習を円滑に開始するための事前学修となる課題を課すなど、準備教育をあらかじめ用意することとする。

(2) 学校推薦型選抜

指定校推薦、系列校推薦及び公募推薦型選抜を実施する。

・指定校推薦・系列校推薦：出身高等学校長の推薦に基づき、学力検査を免除し、調査書や学修計画書を主な資料とし、個別面接試験を組み合わせで判定する。

・公募推薦：書類審査、個別面接に加え、小論文試験を組み合わせで判定する。いずれの方式においても、韓国学部において求める学生像(日韓の架け橋になることができる人)に基づき、能力、適性、韓国語や韓国文化に対する意欲、関心等を多面的かつ総合的に評価する。

(3) 一般選抜(全学部統一選抜を含む)

学力検査として国語、英語を必須として課す方式で、入学志願者の学習能力を客観的に判定することが可能になるように出題方針を立てる。併せて調査書から高等学校における学習の状況、入学者の受入方針に基づく主体的学習意欲や韓国学への関心、適正等を適切に判断することとしている。

(4) 大学入学共通テスト利用選抜

2科目判定とし、国語を必須とし、英語または韓国語から1科目を選択した点数により選抜する。

3) 入学者選抜体制

本学の入試体制は、全学組織である入試広報委員会と、事務担当部署である入試広報部によって統括的に運用される。入試に関連する対策及び合否判定の審議は、大学学長を委員長とする入試対策・判定委員会で行われる。判定委員会においては、不正、私情の入り込む余地のない形で受験生の成績をコンピュータ処理し、その資料に基づき厳密に実施する。

10 教育研究実施組織等の編制の考え方及び特色

1) 教員組織の編制の考え方

韓国学部韓国語学科は、既設の外国語学部韓国語学科を基礎として設置することから、既存の教員組織を最大限に活用し、本学部学科の教育における成果をより一層発揮することが可能となる教員組織の編成を行う。これは、養成する人材像や学位授与の方針を確実に達成するための編制である。

具体的には、本学部学科では組織として研究対象とする中心的な学問分野を「文学(韓国学)分野」としている。そのため、教員組織の編制においては、「韓国語学(第二言語習得を含む)」「韓国語教育学」「韓国の歴史・社会・文化」「韓日翻訳・通訳」を専門とする基幹教員を中心とした構成とする。

さらに、教育課程における必修科目や主要授業科目(「韓国学入門」「韓国語習得論」「フィールドワーク入門」等)を中心に、専門分野における教育上、研究上又は実務上の優れた知識・能力及び実績を有する教授5名、准教授2名、講師2名、及び助教1名の計10名の基幹教員を配置する計画としている。

2) 教員組織の年齢構成

本学部学科の基幹教員の年齢構成については、教育研究水準の維持向上及び活性化に資する構成とするため、60歳台5名、50歳台1名、40歳台4名の構成としている。これにより、経験豊富な教授層と機動力のある中堅・若手教員をバランスよく配置し、特定の年齢層に偏ることのない安定した教員組織を編制している。

なお、完成年度までに定年に達する教授1人の退職が確定しているが、学校法人目白学園就業規則に基づき、後任人事を含めた適切な教員配置計画を策定しており、教育研究活動に支障はない。

1 1 研究の実施についての考え方、体制、取組

1) 研究実施の考え方、実施体制及び環境整備について

本学部学科では、教育研究上の目的である「実用的韓国語運用能力を基盤とした国際的諸問題への対応」を具現化するため、言語学、文学、文化学、社会学、歴史学、教育学等の多角的な視点から戦略的な研究活動を推進する。

ア 研究実施の考え方

現代社会の国際的諸問題に対し、韓国の言語・社会・文化・思想・文学等の専門知識を融合させた独創的な研究を創出する。特に、日本語と韓国語を科学的に分析する「対照言語学」や、実査に基づく「韓国社会・文化研究」を研究の柱とし、これらを教育課程へ反映させることで教育研究の質的向上を図る。

イ 実施体制

本学部学科には、韓国学の各専門分野において高度な研究実績を有する基幹教員（教授5名、准教授2名、講師2名、助教1名）を配置し、組織的な研究指導体制を構築する。また、既に設置されている大学院（国際交流研究科、言語文化研究科等）の専門教育と有機的に連携し、学部から大学院に至る一貫した研究環境を整備する。

ウ 研究倫理の遵守

研究の自由と自主性を尊重しつつ、適正な研究活動を推進するための倫理審査体制を運用する。特に、2年次に実施する「現地調査A・B(韓国)」等のフィールドワークに際しては、調査マナーや倫理を含む事前指導を1年次配当科目「フィールドワーク入門」にて徹底し、高い倫理意識を持って研究を遂行させる。

2) 技術職員等による研究活動のサポート体制について

本学部学科の研究活動を円滑に遂行するため、教育研究環境を支える専門的なサポート体制を整備する。

ア ICT・情報基盤の活用支援

教育課程に「情報活用(ICT 入門～応用)」が組み込まれている通り、本学部学科ではデジタル技術を活用した言語分析や社会調査を重視している。学内の情報システム部門と連携し、研究用設備やソフトウェアの維持・管理、運用をサポートする体制を整える。

イ 海外調査・留学に伴う研究支援

韓国学部韓国語学科の特色である全員留学制度に伴う現地での調査研究活動を支援するため、国際交流担当部門が協定大学との連絡・調整を担う。これにより、教員及び学生が現地での実査や資料収集を効率的かつ安全に実施できる環境を確保する。

3) 研究支援組織の役割等

韓国学部韓国語学科の研究成果を社会に提供し、社会の発展に貢献するという基本理念に基づき、研究活動を組織的にマネジメントする。

具体的には、基幹教員が中心となり、韓国系企業やその日本法人、あるいはサービス業・小売業等の多

様な産業分野への「研究成果の社会実装」を模索する。また、学術研究の推進や競争的外部研究資金の獲得を促進するため、研究支援課が、研究情報の収集、外部機関との共同研究の調整などを担い、研究者が研究に専念できる体制を維持・発展させていく。

1 2 施設設備等の整備計画

1)校舎の施設、整備等

(1)現状

目白台地の西端に位置する本学新宿キャンパスは、東京都新宿区という都心部に位置しながらも、周辺に商業施設や娯楽施設のない閑静な住宅街の中にあり良好な教育環境を保っている。新宿キャンパスの校地面積は 115,074.50 m²、校舎面積は 82,140.86 m²である。

大学と短期大学部の共有施設として図書館、食堂、売店、体育施設等を有しており、教育研究にふさわしい環境整備への努めとしてラーニングコモンズの設置や屋外環境の美化・緑化にも取り組んでいる。また、大学・短期大学部で学ぶ学生の保護者によって組織された教育後援「桐光会」による教育・研究活動の充実、発展、また学生の生活及び福祉増進を目的とした支援が、施設の随所に採り入れられている。

(2)韓国学部韓国語学科の学習環境

2027 年の学部開設に伴い、韓国学の学修支援とともに、韓国留学支援の拠点となる施設を「韓国学センター」ならびに「韓国留学支援室」（いずれも仮称）として新たに整備する。韓国留学支援室は、韓国の協定大学への長期・短期留学を支援し、留学前・中・後の一貫した管理体制を整備することを目的とする。

具体的には、韓国学部助教が常駐し、韓国留学（派遣）に関する業務を総括する。留学中の学生に対しては遠隔指導を行い、学修成果の向上を図るとともに、韓国学及び韓国語の学修支援プログラムを提供する。留学派遣者数の増加に対応した適切な管理体制を構築し、学生の学修支援強化につなげる。

また、韓国学センターは将来的に日本における韓国学の拠点となることを視野に入れ、産学官連携の推進拠点としても機能させる。企業や政府機関との連携プログラムを創出し、韓国学の普及と人材交流を促進するための基盤を整備する。

施設には、学修支援や遠隔指導を行うための多目的教室、韓国語学習用の教材・設備、情報通信インフラを整備し、学生や教員が円滑に活動できる環境を整える。これにより、韓国留学支援の質の向上と、韓国学の発展に寄与することを目指す。

(3)図書等の資料、及び図書館

本学は、新宿キャンパスとさいたま岩槻キャンパスにそれぞれ図書館を設置しており、各キャンパスに設置された学部の特性に合わせた蔵書を整備している。図書は約 40 万冊、学術雑誌等の定期刊行物約 1,300 種、電子ジャーナル約 200 種を有し、利用者は両キャンパスの蔵書を利用することができる。韓国語学科が立地する新宿キャンパス図書館には、図서가約 29 万冊、学術雑誌等定期刊行物約 700 種、電子ジャーナル約 140 種を所蔵している。このうち韓国語学科のカリキュラムに沿った専門図書 約 7000 冊をはじめとして、韓国学術論文データベース KISS (Korean studies Information Service System) 等を契約

するなど十分な図書・資料等を整備している。これらの既存資料を有効活用しつつ、さらに毎年一定程度の購入を継続していくことで、蔵書資料を一層充実させていく。

図書館の開館時間は、平日が午前 9 時から午後 8 時まで、土曜日は午前 9 時から午後 4 時 30 分までと学生の利便性に配慮した利用時間を確保している。この他、検索コーナーには専用 PC を設置し、さらに閲覧席では学生が自由に PC やタブレットを持ち込み、Wi-Fi 環境のもと利用することが可能となっている。

1 3 管理運営

1) 教授会

本学は、教育研究上の理念を踏まえ円滑な教育・研究の運営を行うため、目白大学教授会規則に基づき、学長、専任の教授、准教授、講師及び助教によって構成する教授会を設置する。教授会は毎月1回程度開催し、学校教育法第93 条第2項及び第3項に基づき、当該学部の教育・研究の運営に関し、次の各号に掲げる事項を審議し、学長がこれらの事項について決定を行うにあたり意見を述べている。(資料5)

- (1) 入学、退学、休学、復学、留学、除籍等学生の身上に関する事項
- (2) 教育課程に関する事項
- (3) 試験及び卒業に関する事項
- (4) 学生の指導及び罰則に関する事項
- (5) 規範等の制定・改廃に関する事項

2) 各種委員会

教育研究活動を円滑に行うため、本学新宿キャンパスには次の委員会を設置している。(資料6)

(1) 教員業績評価委員会

教員業績評価の指針・基準策定および実施に関する事項を審議する。

(2) FD実施委員会

FD活動の企画立案、推進および教育改善に向けた組織的研修に関する事項を審議する。

(3) 教務委員会

教育課程の編成・実施運営、教職課程及び各種資格の取得支援、ならびに学籍及び卒業・修了に関する事項を審議する。

(4) 学生委員会

学生の生活指導・相談、奨学金及び保健管理、ならびに障害学生支援及び課外活動に関する事項を審議する。

(5) 就職・キャリア委員会

キャリア教育の基本方針の策定及び施行、ならびに就職・進学支援、指導及び求人企業等に関する事項を審議する。

(6) 図書委員会

図書館の予算、資料の選定、並びに利用に関する事項を審議する。

(7) 入試広報委員会

学生募集及び入学試験の計画立案・実施、並びに広報活動及び調査、定期刊行物の発行に関する事項を審議する。

1 4 自己点検・評価

1) 自己点検・評価の実施体制

目白大学・目白大学短期大学部の自己点検・評価および認証評価等に関する規則第3条に基づき、教育水準向上及び内部質保証を目的として、以下の体制により自己点検・評価を実施している。(資料7)

(1) 統括及び管理体制

自己点検・評価の実施にあたっては、内部質保証委員会が全体を統括し、点検・評価項目の設定や実施要領の策定を行うとともに、各学部・研究科および大学事務局より報告された結果に基づき、具体的な改善策、または向上策の策定・実行を主導する。

(2) 実施組織と運用

学内の各組織(大学の各学部・大学院研究科、短期大学部の各学科及び大学事務局)は、内部質保証委員会が定める実施要領に基づき、毎年度自己点検・評価を行う。対象となる事項は、教育研究活動、学生生活、組織及び運営に関する事項など多岐にわたり、各組織はその結果を内部質保証委員会へ報告する。

(3) 外部評価の活用と報告・公表

客観性を担保するため、学長は自己点検・評価結果を外部評価委員会に提出して意見を聴取し、それらを質保証につながる改善計画の策定等に活用する。最終的な点検・評価の結果は、学長を通じて理事会へ報告されるとともに、学校教育法第 113 条、学校教育法施行規則第 172 条の2の定めに従い、適切に外部へ公表する。

(4) 事務推進体制

自己点検・評価に関する実務及び庶務は、大学改革推進室が担当し、円滑な運用を支援する。

2) 自己点検・評価結果の公表

本学では、規則に基づいた自己点検・評価等を恒常的に実施しており、具体的には毎年度、個々の教員の自己点検・評価シートの作成を踏まえた各教育組織等からの報告を取り纏め、大学全体の年次報告書としての自己点検・評価報告書を作成している。

ア) 自己点検・評価報告書

https://www.mejiro.ac.jp/univ/about/evaluation/self_evaluation/

なお、本学は公益財団法人日本高等教育評価機構による機関別認証評価を令和5年度に受審し、

同機構の定める評価基準を満たしていると認定され、下記のとおり公表している。

<https://www.mejiro.ac.jp/univ/about/evaluation/jihee/>

イ) 令和5年度大学機関別認証評価 自己点検評価書

https://www.mejiro.ac.jp/univ/pdf/jihee_self_inspection_r5.pdf

ウ) 令和5年度大学機関別認証評価 評価報告書

https://www.mejiro.ac.jp/univ/pdf/jihee_kikanbetsu_r5.pdf

上記以外にも、本学では毎年 FD 活動実施報告書を作成するほか、学期ごとに「学生による授業評価アンケート」を実施、結果を公表するなど組織的な改善を実施している。

15 情報の公表

1) 教育情報の公開

教育情報の公開については学校教育法第113条、学校教育法施行規則第172条の2に基づいて、本学のWebサイトにおいて、「建学の精神」「学部・学科の名称」「教育研究上の目的」「教員組織、業績、保有学位」「入学等に関すること」「授業等に関すること」「学修の成果等に関すること」「学納金等に関すること」「卒業後の支援等に関すること」「キャンパスの概要等」「自己点検・評価報告書」及び「認証評価の結果」について公開している。

ア) 大学の教育研究上の目的及び3つのポリシーに関すること

<https://www.mejiro.ac.jp/univ/about/>

(建学の精神、沿革、アドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシーを公表)

イ) 教育研究上の基本組織に関すること

<https://www.mejiro.ac.jp/univ/about/regulations/>

(学則について公表)

https://www.mejiro.ac.jp/univ/about/organization/?srid=tab_content_03

(学校法人目白学園組織図について公表)

ウ) 教育研究実施組織、教員の数ならびに各教員が保有する学位及び業績に関すること

<https://gjd.mejiro.ac.jp/mjrhp/KgApp>

(教員の氏名、職位、学位、専門分野について公表)

https://www.mejiro.ac.jp/gakuen/pdf/2025_teacher_org.pdf

(教育研究実施組織について公表)

エ) 入学者の選抜に関すること

<https://www.mejiro.ac.jp/univ/jyukensei/admission/>

(入学者選抜の制度やオープンキャンパス、出願・エントリー方法など募集内容の詳細について公表)

オ)入学者に関する受入れ方針及び入学者の数、収容定員及び在学する学生の数、卒業又は修了した者の数ならびに進学者数及び就職者数その他進学及び就職等の状況並びに外国人留学生の数に関すること

<https://www.mejiro.ac.jp/gakuen/disclosure/?srid=stdnt#stdnt>

(入学者の受け入れ方針、入学者数、在籍者数、卒業者数、進学者数及び就業者数について公表)

カ)授業科目、授業の方法及び内容ならびに年間の授業の計画に関すること

<https://www.mejiro.ac.jp/univ/course/>

<https://www.mejiro.ac.jp/univ/campuslife/shinjuku/class/>

(授業科目等についてはカリキュラム及びシラバスを公表)

キ)学修の成果に係る評価及び卒業又は修了の認定に当たっての基準に関すること

<https://www.mejiro.ac.jp/univ/campuslife/shinjuku/class/examination/>

<https://www.mejiro.ac.jp/medai/>

(成績評価、単位認定について及び定期試験履修要項において卒業の認定基準を学科ごとに公表)

ク)校地・校舎等の施設及び設備その他の学生の教育研究環境に関すること

<https://www.mejiro.ac.jp/univ/campuslife/shinjuku/life/>

(校舎等のキャンパスマップ、食堂・売店を含む各施設の利用について公表)

ケ)授業料、入学料その他の大学が徴収する費用に関すること

<https://www.mejiro.ac.jp/univ/campuslife/tuition/>

(学納金について公表)

コ)大学が行う学生の修学、進路選択及び心身の健康等に係る支援に関すること

<https://www.mejiro.ac.jp/univ/campuslife/shinjuku/support/>

<https://www.mejiro.ac.jp/univ/career/>

(進路選択ならびに学生支援のページをそれぞれ設け、キャリアセンター、各種相談室について公表)

サ)その他

<https://www.mejiro.ac.jp/univ/about/cp/>

<https://www.mejiro.ac.jp/univ/about/regulations/>

<https://www.mejiro.ac.jp/gakuen/disclosure/approval/>

<https://www.mejiro.ac.jp/gakuen/disclosure/implement/>

https://www.mejiro.ac.jp/univ/about/evaluation/self_evaluation/

<https://www.mejiro.ac.jp/univ/about/evaluation/jiheer/>

(カリキュラム・ポリシー、学則、各設置認可申請書・届出書、各設置計画履行状況等報告書、自己点検・評価報告書、認証評価報告書を公表)

シ)大学院学位論文に係る評価に当たっての基準

https://www.mejiro.ac.jp/graduate/about/evaluation_criteria/

(本学大学院における学位論文に係る評価基準を公表)

2) 財務情報の公開

<https://www.mejiro.ac.jp/gakuen/disclosure/>

財務情報の公開については、「私立学校法の一部を改正する法律等の施行に伴う財務情報の公開等について」(2004 年7月 23 日文部科学省高等教育局私学部長通知)に則り、本学 Web サイトの情報公開ページにおいて公表している。2012 年度以降の決算概要について「資金収支計算書」「消費収支計算書」「貸借対照表」「財産目録」「監査報告書」を報告しており、2013 年度からはグラフを用いてステークホルダーが理解しやすいように「決算概要」を追加掲載している。2015 年度決算からは、学校法人会計基準の改正を受けて「決算概要」「資金収支計算書」「活動区分資金収支計算書」「事業活動収支計算書」「貸借対照表」「財産目録」「監査報告書」の区分により公表している。

1 6 教育内容等の改善を図るための組織的な研修等

1) 授業内容等の改善に係る取組(FD)実施状況

本学では、新宿キャンパス(心理学部、人間学部、社会学部、メディア学部、経営学部及び外国語学部の6学部所在)及びさいたま岩槻キャンパス(保健医療学部及び看護学部所在)の両キャンパスにFD実施委員会を設置し、教育内容の改善を目的とした組織的な研修及び研究、ならびに教員の教育技術に関する事項を所掌し、実践的なFD活動を継続的に推進している。

さらに、令和5(2023)年度からは、FDに加えてSD研修を含めた体系的な研修体制を整備するため、学長を委員長とするFD・SD推進委員会を設置した。同委員会では、教職員が本学の求める教員像に基づき、授業の内容及び方法の改善を図るための組織的な研修及び研究としてのFDの計画・実施に加え、教育研究活動等の適切かつ効果的な運営を図るため、法令遵守並びに大学運営に必要な能力及び資質を向上させるための機会としてのSDの調整を行っている。(資料8)

具体的には、全学的な取組として毎年2回全学FD研修会を実施している。全学FD研修会は授業改善や教学改革を主な目的とし、外部講師による講演や公開シンポジウムを開催しており、研修テーマは、近年の高等教育を取り巻く動向を踏まえ設定している。2024 年度は「AI・データサイエンス教育とこれからの高等教育」、2023 年度は「学修者本位の大学教育へ:学修成果を可視化できる教育と学修支援」、2022 年度は「中退リスクの高い学生の早期発見と初年次教育」をテーマに採り上げた。これらはいずれも今日的課題や社会的要請を反映したテーマであり、教員の教育力向上及び組織的な教育改善に資する内容となっている。教員の参加率は高く、2024 年度第1回FD研修では参加率 100%を達成し、第2回FD研修においても 94%

と高水準を維持している。

学部・学科単位のFDとしては、当該年度のFD活動計画書の作成及び同報告書の提出を義務付けている。各年度の活動計画書及び報告書は、FD実施委員会を通じて各教育組織に周知されており、各学部等において実施されている自主的・自律的なFD活動の計画及び成果を相互に参照できる体制を整えている。これにより、大学全体のFD活動を視野に入れながら、次年度のFD活動を計画・整備することが可能となっている。

個々の教員においては、学期ごとに実施している学生による授業評価アンケートの結果を踏まえ、学内Webサイト(スタッフネット)上で「教育活動自己点検・自己評価アンケート」に回答する仕組みを設けている。各教員が当該年度における教育活動の成果や課題を整理し、次年度の授業改善に活用することとしている。

高等教育研究所では、高等教育に関する教育上の諸課題について、資料の収集・分析を通じた実証研究を行うとともに、本学教員への教育支援機能を担っている。同研究所の事業内容には、「本学教員への教育上の支援」及び「全学FDに関する事業の実施」が含まれている。さらに、研究所機関誌『人と教育』及び研究所が編集を担当する『目白大学高等教育研究』において、本学の教育の充実に資する具体的な教育実践例とその成果、ならびに教育改善に関する提言等を掲載しており、FD成果を学内外に発信する重要な場となっている。(資料9)

韓国学部韓国語学科においても、全学的なFDの取り組みに加え、教授会を中心として年度ごとにFD活動計画を策定のうえ実施し、自己点検・評価を踏まえたFD活動報告書の作成を行うこととしている。これらを通じて、教育改善に向けたPDCAサイクルを毎年度着実に確立していく。

2) 大学経営における組織力の強化を目指した一般職員等の職務上の能力開発(SD)の実施状況

目白学園では、学校法人目白学園SD実施規程を定め、大学の管理運営及び教育・研究支援に関する能力の向上を目的として、体系的なSD研修を実施している。具体的には、一般職員を対象に、新任者・中堅者・管理職の区分に応じた階層別研修と、教学改革等において本学が直面する課題に対応するための専門的知識の習得を目的とした職種別研修を実施している。(資料10)

これに加え、2015年度から教員と職員が合同で参加する全学FD・SD研修会を定期的に行い、教職協働による大学運営及び教育改善の推進に取り組んできた。

令和3(2021)年度からは、学園主催のSD研修について、従来の職員中心の体制を見直し、全大学教員を対象に含めた研修を定例化した。これにより、ハラスメント防止、個人情報保護、発達障害学生への対応等、大学運営及び教育活動において不可欠なテーマを設定し、教職員の共通理解と対応力の向上を図っている。令和6(2024)年度のSD研修においては、「発達障害学生への対応と合理的配慮」をテーマとして実施し、大学教員及び大学職員を合わせた参加率は95%に達するなど、高い参加実績を示している。

今後も、本学では大学を取り巻く社会環境や制度改正の動向を踏まえ、教職員に求められる役割や能力の変化に対応したSD研修を継続的に実施することとしており、全学的な体制の下で、教育研究活動及び大学運営の質的向上を図っていく。

17 社会的・職業的自立に関する指導等及び体制

1) 教育課程内の取り組みについて

韓国学部韓国語学科では、韓国学及び韓国語学の体系的な学修を通じ、多角的な国際視野と柔軟な適応力を備え、社会的に自立した人材を養成する。

韓国の歴史・社会構造の理解に基づき、異文化を尊重しつつ高度な対人交渉を行う多文化共生コミュニケーション能力の養成を教育課程の柱に据える。低年次より社会人としての基礎的素養やマナーを修得させるとともに、実社会で通用する実践的な課題解決能力を養う指導を展開する。

学生全員が留学(交換留学またはデュアル・ディグリー留学)を通してキャリア形成を図る。留学期間中は「現地研修」をオンライン講義で並行して受講し、現地での実体験を学術的な知見へと昇華させる組織的な指導を行う。これにより、高度な語学運用能力のみならず、多様な環境における課題克服力や異文化適応力を、職業的自立に資する汎用的スキルとして定着させる。

帰国後は、韓国学各分野の専門セミナーにおいて留学中に得た知見や関心を専門的に深化させる。学生個々の興味を専門的な研究と卒業後の進路(韓国企業やグローバル企業等への就職、韓国語教育機関等)に接続させる一貫した指導体制を構築し、自己のキャリアを主体的に構築できる能力を育成する。

2) 教育課程外の取り組みについて

韓国学部韓国語学科では、教育課程内での学修を補完・発展させる場として、韓国系企業や関連団体との連携に基づいた組織的な教育課程外プログラムを展開する。

韓国系企業及び関連事業者との共同ワークショップや、地域・国際ボランティアへの参加機会を積極的に提供する。これらの活動を通じて、教室内での学修に留まらない「生きた韓国語」の実践的な活用能力を向上させるとともに、実社会の文脈における韓国文化・コンテンツへの理解を深める。これにより、日韓両国の相互理解を促進し、両国の懸け橋となるグローバルな素養を醸成する。

具体的なキャリアパスを意識させる取り組みとして、日韓逐次通訳の基礎体験や、韓国企業を対象とした業界研究の基礎を早期から職業観の形成を図る。これらの課程外活動を、学生が自身の専門性を将来のキャリアに直結させるための実践的トレーニングの場として有効に活用し、円滑に社会的・職業的自立へと導けるよう支援する。

3) 適切な指導体制の整備について

韓国学部韓国語学科を設置する新宿キャンパスでは、キャリアセンターを中核として強固な進路支援体制を構築している。

キャリアセンターには実務に精通した専任職員9名に加え、高度な専門性を有するキャリアカウンセラーを4名常駐させている。さらに学科ごとに選出する就職・キャリア委員の教員と緊密に協働することで、学生一人ひとりの適性や志向に応じたきめ細かな個別指導を展開している。

本学のキャリア教育は、学生が正課内・外の多様な経験を通じ、自己の能力を自覚し、社会に主体的に関与する力を育成することを基本方針としており、これに基づいて低年次からのキャリア形成プログラムを体

系的に実施し、学生の就業力の向上を図っている。

韓国学部の特長である全員留学に対応し、海外滞在中においてもキャリア支援が途切れないよう、ICT を活用したオンライン面談・指導体制を整備している。留学期間中から進路選択や就職活動に関する専門的なアドバイスを継続的に提供することで、国際的経験を社会的自立へと直結させる環境を担保している。